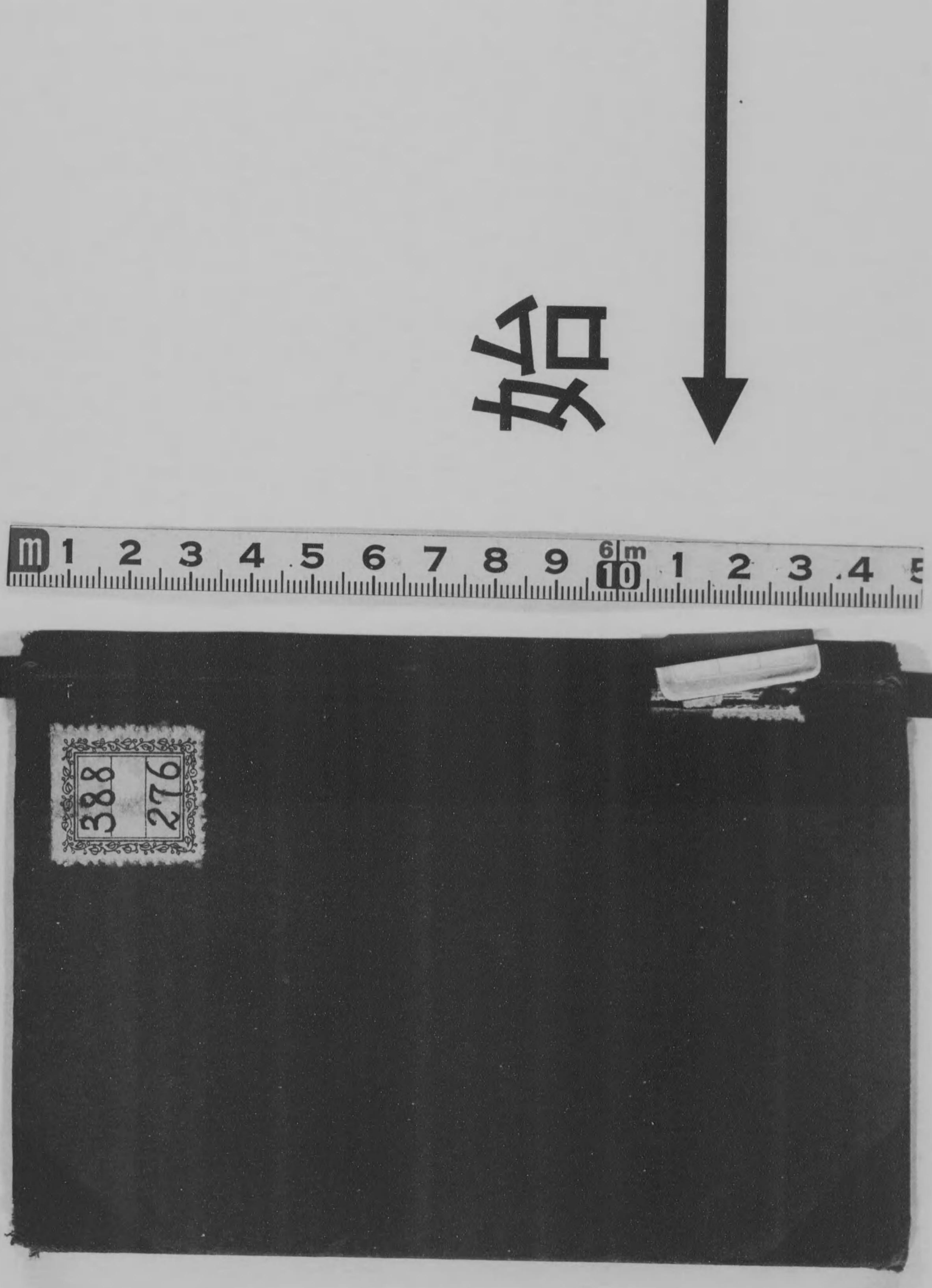
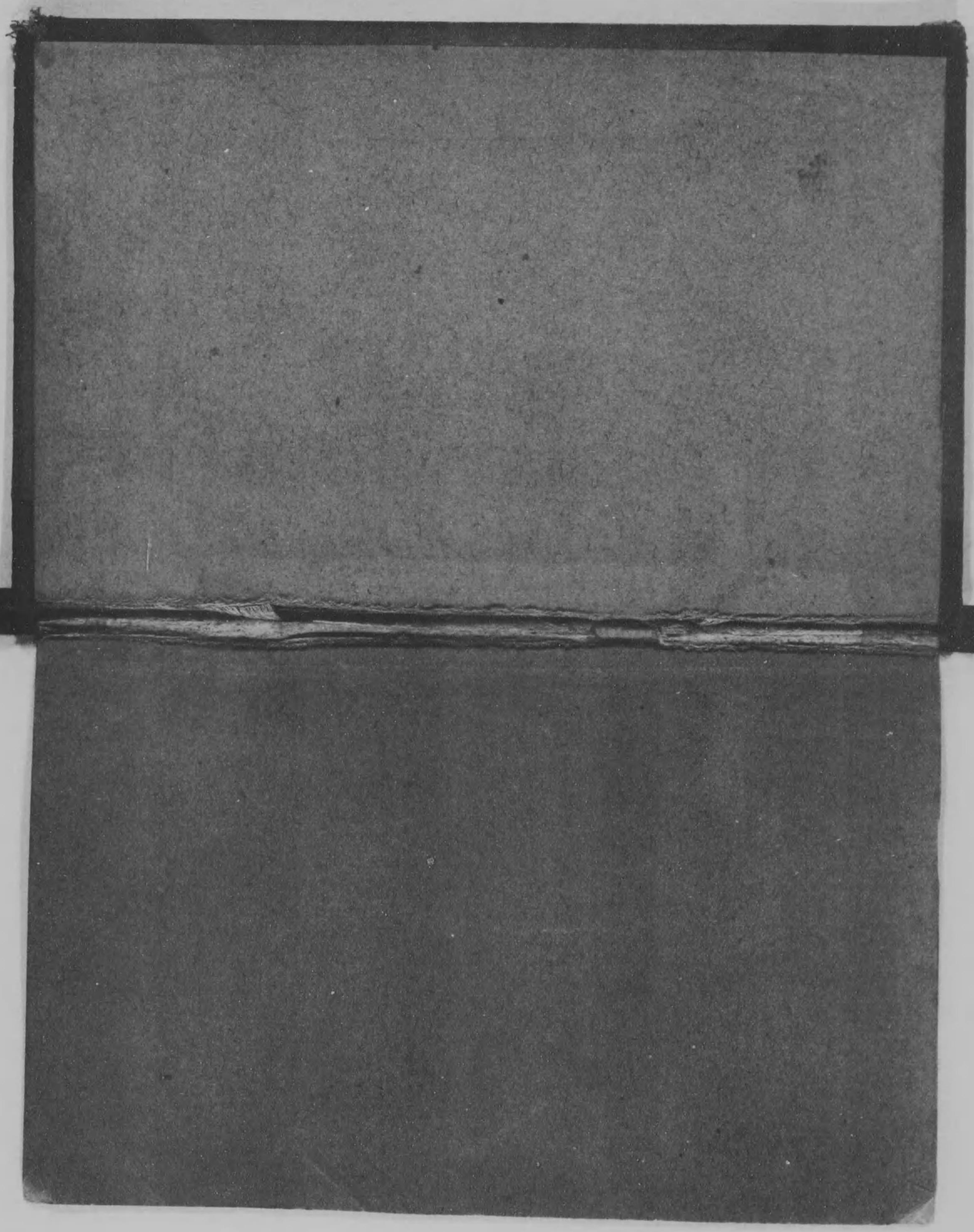

388
276



和文
佛文

世界的革命

全一

佛蘭西藝文社編

388-27

序

普通、革命と云ふ言葉は、政治とか、國憲とか、又は國民の社會狀態などに於ける多少重大な改變を意味するものに解せられてゐる。例へば明治初年に行はれた日本の（謂明治維新）の如きは、此種の改變の一つであつた。此時の革命は如何に重大であつたとしても、詰りは一ケ國に於ける特殊の革命に過ぎなかつた。

處で、世界的革命と云ふ言葉は、モット廣く、モット深い改變を意味するもので、世界各國民の思想、風俗、法律、制度などに於ける大擾亂を示すのである。それ故世界革命とも云ふ。

此の革命は人類史上に於ける一種の現象、唯一の出來事であるばかりではない。今日では此の革命に世界の將來が重大に係つてゐる。此の二つの理由から見ても、恐くは革命ほど吾人の研究に價する問題はなからうと思ふ。

大正 28 5 9. 内交

革命によつて生じた禍害や、革命者の企てた殘虐や、殊に露西亞に於ける過激派の暴行などを、吾々が新聞紙上で聞知するときには、誰しも斯の如き横暴に對して忿然として憤らない者はない、又自國に斯の如き禍害の入り來るのを恐れない者はない。

乍然革命の結果を此の如くに非難してゐる者が、多くは革命の思想を自分が承認して、それを己れの身邊に宣傳してゐる、革命の思想と云ふのは外でもない、革命の因つて生ずる主義原則を云ふのである。但ださう云ふやうな主義原則の悪い結果は直ぐに出て來ないから、多くの人々はそれ等の思想がどれほど有害で、又どれほど危險であるかを考へもしないのである。

それ等の思想の博播するときには、何處に於ても社會の一大危險となるのである。譬へて見ると、丁度水が家屋の土臺に徐々と侵蝕するやうなものである。家屋は一朝にして崩壊しないけれども、水は絶えず侵漸しつゝあるから、注意警戒しないと、思も寄らないときに、家屋は傾倒して了ふ、傾倒するときには、屋内に安全だと思つてゐた人々を悉く壓潰して了ふ。革命思想に侵蝕せらるゝ社會も丁度その通りである。

吾人は此の如き大禍禍の危險を、否後日の不幸を豫め避けたいが爲に、此の一小冊を著して、眞個愛國愛世の識者に向ひ、簡單ながらも明快に、左の事柄を說いて置きたいと思ふ、卽ち世人の口に上つてゐる革命とは畢竟何であるか？科學的に革命を生ずる原因はどんなものであるか？革命と其の結果を避けるが爲には何うしたならば可からうか？

禍が既に來て了つた後に、それを除き去らうとする方道を考へるのは、最う遲過ぎる、天の未だ陰雨せざるに綢繆するのが、寧ろ用心深い賢明の道である。

大正九年五月上浣

著者識

世界的革命

（一）

今より凡そ十五年ほど前に、「革命の準備」と題する書物が世に公にされた。此の書物の世に公にされた時分には、餘り世間の注目を惹かなかつたから、それを讀んだ人々は大抵皆、勿論當だ、虚妄だ、激越だと思つた。要するに「不穩當」と云ふのが、此の書册に對する世間一般の批評であつた。

實際ところ然うであつたかも知れない。何ぜなればその時分（即ち十五年ほど前）には、全世界が殆ど泰平の世の中であつた。勿論數ケ國に於て彼處此處に多少激甚な政爭が起つて、輿論を激成したやうなことはあつたけれども、公安民秩を危うするほどには至らなかつた。

それ故一面には世界一般の平安無事なるを考へ、他面には前記小冊子の裡に豫測的に書き記された紛擾や暴行などを考へて見ると、その書冊が前に述べたやうに過當、虚妄、激越と云ふやうに批評されたのも、無理ではなかつた。

(二)

然るに最近十五年の間には、世界の局面がガラリと一變して了つた。その當時識者は多く、戰爭は今後不可能になつて了ふと思つた。人文の進歩はすさまじい勢であり、國民の知識も開け切つてゐたから、全世界の國民が意志の疎通と相互の妥協を謀る知慮もなくして、徒らに殺伐を事とするやうな野蠻極まる事をしやうなどとは、夢にも思はれなかつたのである。

處が其後どう云ふ事になつたと云ふことは、人が皆知つてゐる。即ち戰爭が又々突發した、而も昔行はれたやうな普通の戰爭ではなく、振古未曾有の大戰爭、即ち如何なる野蠻國民の間にも類例のないほど殘酷極まる方法を以て行はれる文明戰が突發したのである。

戰爭ばかりではない、革命も襲來した、而も國民が相互に殺し合つたり、滅ぼし合つたりしてゐる間に襲來したのである…。殆ど世界各國に於て、最近四年以來、革命は各國の舊制度を破壞し、王朝を顚覆し、帝王を廢滅し、國憲を變改した、「萬事を更新する爲に、萬事を破壞する」と云ふのが卽ちその政綱を約した言葉である。

斯の如く戰爭の後に革命が突發したのであるが、多くの國に於ては、例へば露西亞や獨逸などに於ては、戰爭と革命が殆ど同時に勃發したのである。

(三)

本書は革命のことを論ずるのが目的であるが、此の問題に就て吾人の論じたいと思ふ所を了解して貰ふには、先づ第一革命とは何う云ふ意味であるかを精確に決定し置く必要があると思ふ。

革命論者の口には二つの文字が間斷なく繰返されて、それが絶えず其の言論に上つて來る、その二つの文字と云ふのは壓制と自由と云ふ文字である。て、此の二つの文字の意味

が判れば、革命の何物であるかゞ一番よく判る。

革命論者の意見に據れば、壓制とは何であるかと云ふと、壓制とは凡て人の自由を妨害し、減少し、束縛し、桎梏する所のものを云ふ。自由とは何であるかと云ふと、自由とは各人が好むが儘に爲し得る絶對の權利を稱するのであるので、之に對しては誰も其の欲するが儘に爲すのを妨げたり、又は其の欲しないことを强て爲させたりする權利はない。隨て凡ゆる壓制を撲滅し、凡らゆる障害を排除して、圓滿なる自由を要求するのが、革命の目的であり且革命論者の目的である。

恁う云ふと常識を備へてゐる正しい人は直ぐに憤慨して絶叫するであらう、「そんなことは不條理千萬なことである」と。然し讀者はさう端的に憤慨せずに、少しく辛抱して頂きたい。吾人はまだ議論をしてゐるのではない、單だ革命と云ふものはどんなものであるかを成るべく精確に解說しやうとしてゐるだけのことである。議論は追つて其後に試みる積である。

(四)

革命論者は人類を壓制より救出する積であると曰つてゐるが、その所謂壓制と云ふものは何であるかを研究するのが第一着のことである。壓制は澤山ある、否寧ろ一相變らず革命論者の說によつて話すのであるが—今迄のやうな社會には、到る處壓制ばかりである。それ等を一々列擧することは、一朝一夕では出來ない、それに必要な事でもない。乍然「革命事業」と云ふものを精確に知らせやうとするには、少くもさう云ふやうな社會的壓制の主なるものを簡單に叙說する必要がある。

乃て吾人は讀者の精神に不明な點を遺して混雜させないやうに、順に從ひ序を逐ふて、成るべく明瞭的確に論述して見たい。

(五)

先づ第一、人を幼年時代から考へて見る、卽ち家庭に於ける人、父母の家に於ける人からして考察して見たい。人は如何にして成長し、如何にして養成されるであらうか、換言

すれば、家庭教育は那邊に存するかと云ふのである。抑々子供と云ふものは何を見ても、何を聞いても、まだ理解しないうちから、それを眞似たり、又はそれを鸚鵡的に繰返したりすることが出來るもので、さう云ふやうになると、毎日朝から晩まで、日に何遍となく、母親や又は其他の人から、「それは惡いから、爲てはいけませんよ、それは宜しくありませんから、言つてはいけませんよ」と、殆ど間斷なく戒められたり、反覆されたりしてゐるのを耳にしてゐる。「斯う言はなければなりませんよ、斯う爲なければなりませんよ」と云ふ言葉に、子供が從へば、ほめそやされて、御褒美を貰ひ、從はなければ、惡く言はれて、罰される。

こんな鹽梅にして、子供の精神には一隨て人の精神には一幼少の時分から、世にも最も壓制的な先入と云ふものが生じ 來る、卽ち人間のいろ〳〵の行爲は、區別しなければならぬもので、或行爲は賞讃すべきもの、或行爲は非難すべきもの、或行爲は善行爲、或行爲は惡行爲と云ふ一種の考が起るのである。故に善と惡とは實際根本的に差別あるもので、

その結果人々それ自らも、其の行爲の善惡によつて、善人と惡人の二階級に自然分れると云ふ理窟になる。

かう云ふやうな先入によると、今日の社會には、善惡の間に大海のやうな廣く且深い溝があるやうに思はれる。人々の操守や行爲を、明細に規定するが爲には、いろ〳〵の法則又は法律がある。此等の法則及び法律が相集つて『人間の道德』と稱して來た所のものを成立せしめ、それが總合した上、複雜にして且浩澣な法典を形造るのである。これは本統の學問で、人は曾にそれを學ばなければならないばかりでなく、それを實施しなければならないのであるが、それが甚だ六ヶ敷い。

（六）

凡らゆる社會的壓制の中で、最も過酷で又最も忍び難いものは、丁度此の道德法である、それは又どう云ふ譯であるかと云ふと、道德は凡て何事にも行き渡つて、人間一切の行爲、隱れたる行爲にも當嵌まるからである、それ故何處に於ても、又何時でも自由を妨げたり、

拘束したりする。飜て他の方面から考へて見るに、「先入」と云ふものは恐ろしいもので、此の道德法を守らない者があると、其者は何か恥しい汚點でも印してゐるかのやうに他の人々に思はれる、それに社會に於ていくら顯要の位地に立つてゐる者でも、墮落して、一擧直に自分の面目をも、他人の信用をも失つて了ふ。

それ故革命論者が、萬事を改造するつもりて萬事を破壞しやうと企つるに當り、第一の壓制として撲滅しやうとする所のものは卽ち丁度此の道德法である、此の道德法が存在して、人々がそれを守らなければならぬと思つてゐる間は、彼等は迚も自分等の自由を圓滿に享有することが出來ない。

（七）

然しながら若し果してさうであるとするならば、所謂改造された新社會に於て人間行爲の法則となるものは何であらうか？何ぜなれば人は何かを行ふ場合には、どうしても何か法則となるものがなければならないからである。處が世には革命の道德ほど判り易く且守

り易いものはない。卽ち今後の新社會に於ては、人の行爲が有益又は有趣味でありさへすれば、善行爲と稱せられ、有害又は無趣味であれば、惡行爲と稱せられてあらう。成功して、期した目的を達すれば、正當な行爲と見做され、失敗すれば、非難せられ、蔑視されるやうになるであらう、成功しない位であつたならば、初から始めなければよかつたといはれるであらう。

正邪（義不義）のこともてんで問題になるまい。そんな事を話す者がなくなるであらう。何事も成功次第である。義であらうが、不義であらうが、成功しさへすれば、萬衆（みんな）に稱讃（ほめ）られるであらう。新社會では、一番巧猾な者が、一番褒められ、一番狡猾で且一番強い者が、一番優れた者と思はれるであらう。

その結果どうなるかと云ふと、今後青年子弟に幼少の時から教へなければならない事は昔のやうに惡を避けて善を行つたり、正人君子の名を貴んで、それを一切の利樂にも優つてゐると思つたりするのではなく、たゞ〳〵自分の利益をよく辨へて、自分の企業に成功

しさへすれば可いと云ふやうになつて了ふであらう。

革命はそんな風にして自由に對する第一の拘束即ち道德法を消滅せしめて、善惡の差別を撤廢して了ひ、そんなものは詰り有史以來の謬想て、昔の人々の無知と先入の遺習に過ぎないと云ふのてある。吾人が先きに第一の社會的壓制と稱したものは即ちそんなのて、それさへ除去すれば、廣く自由の門が開かれる譯てある。

（八）

第二の壓制は主權てある。主權とは何てあるか？之を精確に定義すれば、左の通りてある、今日のやうな社會組織に於ては、人は主權に衝突からずには一歩も身動きが出來ない。先づ第一家庭に於ては父母の主權と云ふものがある。子供は父母の許諾がなければ殆ど何にも出來ない。父母が子供に命ずるときには、否應なしに無理にても行はせる。それから學校に行けば、教員の主權があるし、工場に往けば、傭主の主權があるし、道路に出づれば、警官の主權がある。

如何なる社會に於ても、國の端から端まで、國民相互の關係が一切、否、その一擧一動が皆立法者の主權とか、裁判官の主權とか、獄吏の主權とか、甚しきは創手（刑吏）の主權などに規定される。約めて言へば、到る處主權ならざるはなしてある。

贅言を費すに及ばないが、今迄善良なる國民は此等の事を見ても毫も不平を鳴らさうとはしなかつた。却て正しい法律を忠實に守ることは、自然の事てあると思ひ、自分等に對して主權を握つてゐる者に對しては、いつも深き敬意を表して、從順と愛敬を以て服從して來てゐる。少くも昔の人々は然う云ふやうにして來たのてある。

（九）

然るに革命論者の言論によると、然うではない。彼等の意見に據れば、主權と云ふものは、全國、否、全世界に行渡つて、宛も一大鐵狀網の如きものてある。一切の民はさう云ふやうな鐵狀網の中に包まれ、緊られ、押付けられてゐるから、呼吸困難の狀態になつてゐるのてある。今は丁度此等の鐵狀網を打破つて、凡ての國民に其の自由を與へる時機てある云々と。

又曰く、元來主權なるものは空文字に過ぎない、そんなものは在るべき筈のものでない、主權は多年世界を壓して來たもので、謂はゞ野心家の一種の簒奪である。此等の野心家は優勝者であつたから、他の人々を統御しやうと思つたので、其後彼等が主公になつたとき、他の人々を統御するのは、自分等の權利であると主張したのである。

性質の上から言へば、人々は皆同等であつて、誰も自ら他の人々を統御する權利を有つてゐない。人としては誰でも皆自由である、獨立である、自分の上に立つべき人を有つてゐない。社會に於て他の人々を統治する責務を有つてゐる者があるやうになつたのは、他の人々に優れてゐるからではなくて、社會がそれを選立し、それに委任して、さう云ふ責務を盡させたからである。國家唯一の主上は國民それ自らである、て、若し主權なるものがあるとすれば、それは國民の意思に過ぎない。

（十）

革命論者の意見によれば、官吏と稱する者は國民の「首領（かしら）」ではなくして、國民の「代

理」である。所謂國民の公僕て、主公ではない。法律を立てたり、又は法令を發布したりするときにも、自分等の意思を强命するのてはない。自分等の意思を施行するに過ぎない。命ずるやうに見えても、實は國民の意思を施行するに過ぎない。

矢張革命論者の言論によると、今後工場に於て命ずる所の者は傭主てはなくして、職工てあらう。學校に於ても教員てはなくして、生徒てあらう。家庭に於てもその通りて、主公は子供て、父母は從つて行かなければなるまい。

吾人は玆に直ぐ附け加へて言つて置く、こんな革命の事業は、どうか世界の安寧秩序の爲に全然行はれないやうにして貰ひたいものてある。何ぜなれば若し此の地上が革命によつて斯の如く攪亂されたならば、地球は迚も住まはれなくなるてあらうから、人々は星の世界ても尋ねて、其處に住換をしなければなるまい。

（十一）

實際革命論者が一國の主君となるやうになつたならば、國內はどう云ふことになるてあ

らうか？それは歴史を見ても、又今日世界の大部分に於て行はれてゐる事象を見ても、分り切つてゐる。

彼等（革命論者）は自由の名を標榜し、又は壓制を撲滅すると云ふことに籍口して、凡て社會に於て主權を表明し若くは聯想せしむる所のものを、一切顚覆し又は破壞しやうとしてゐる。社會階級の上から下まで、即ち上は一國の元首より下は警察の一吏員に至るまで、凡て主權の或部分を掌握してゐる者があるならば、それを悉く一掃して了はなければならぬと言つてゐる。してそれは空嚇（からおどし）ではない。現に彼等は火や、鐵や、毒などを以て其の企圖を施行しつゝ、宿命的に其の目的を達成するが爲に如何に努力しつゝあるかと云ふ事は、今では萬民周知の事である。

そして彼等が勝利を占め得た彼等のみが殘つて、兵馬の權を握るやうになつたならば、彼等は何うするであらうか？奇怪にもその時は彼等は最う主權が壓制であると云ふやうなことを言はぬやうになるであらう。却て自分等のみが國の主權者であり、國民の首領であると公然自宣するであらう、其時彼等に反抗を試みやとする者があれば、其者こそ可哀相である、そんな者があれば、直ぐに死刑に處せられるであらう。彼等の意見によれば、革命に反對を企てる事は、否、それを考へる事さへ、天地に容れられぬ大罪逆であると云ふ、語を換へて言へば、彼等の行つた事を人が行へば、最大罪逆と見做されるのである。

（十二）

では、その時自由はどうなるであらうか？そんな言動こそ却て堪へ忍ぶべからざる壓制ではあるまいか？如何にも然うであるが、然し彼等は勝利を得た上は、國内の他の國民に對して、最も嚴酷な、否、往々は最も殘忍な壓制者となつてゐても、口に自由を云々することを止めまい。寧ろ却てそれを絶叫し、以前よりも力强く公宣するであらう。然し人は最う誰も欺されまい。彼等は自分等の爲にばかり何を爲しても可いと云ふやうな絶對自由を要求するだらうけれども、他の人々にはそれを與へまい、他の人々にはたゞ一つの自由しか認

めまい、即ち從ふの自由……さもなければ死ぬるの自由、それのみてあらう。

然し人或は曰ふてあらう、誰に從ふの自由を指すのてあるか？と、無論國民の新らしい主君、即ち彼等革命論者に從ふの自由を指すのてある。然し何ぜ他の人々が彼等のやうな者に從ふてあらうか、他の人々も亦同じ人間てある、同じく自由の權利を有つてゐる者てあ る。それてあるから他の人々が、死ぬること(殺されること)を恐れてゐる間、或は自分等が彼等よりも强いと自信するやうになれない間は、彼等に從つゐるてあらうが、然し他の人々とても遠からずして互に相合同し、互に相團結して、第一の革命に反對するやうになるてあらうから、玆に第二の革命が起つて、戰爭が國民と國民との間に行はれるやうになるてあらう(內訌が突發するてあらう)。國內には到る處に安寧と平和が攪亂されて、人民はいろ〳〵と憂慮し、不幸の淵に陷り、財產などを暴略されて、嘆くより外はあるまいが、さう云ふ風に塗炭の苦みに際したならば、「人物」の起らんことを絶叫するてあらう、即ち權利を持つて、國柄を握り、到る處に安寧秩序を恢復し得る正義の士の出てんことを要求するてあらう。

言ふ迄もなく主權と云ふものは、それを濫用するときには、時々壓制を來たすものてある、けれども凡そ壓制の中に一番惡く、又一番恐るべきものは何てあるかと云ふと、それは主權てはなくして、無政と云ふものてある、丁度社會に主權がなくなつて了ふのてある。

（十三）

第三の社會的壓制は所有權てある。如何なる意味に於て所有權は壓制てあるかと云ふと、所有權は國民の自由を束縛するからてある。それは分り易い事てある、例へば都市を見るに…都市には家毎に主人がゐる、家には凡ての物がその所有者の所屬物になつてゐる。村落や、田園や、鄉土などを見るに、田ても、畠ても、庭ても、樹ても、或所有者の所屬物になつてゐないものは一つもない。

處て我の所有に屬してゐるものならば、我物てある、我のみがそれを使用したり、それを賣却したり、與へたければ、それを人に與へたりする權利を有つてゐる、我以外には誰

もそれを自由にする權利を有つてゐない。我物ならば、我の所有に屬してゐるものである
から、我はそれを所藏してゐて、それを奪ひ取らうとする者があれば、我はその者に對し
て防禦する。

然し何にも持つてゐない者ならば、どうするであらうか？何處に於ても他人の家や、庭
や、畠から排斥されるであらう、それは所有權と云ふ權利によつて排斥されるのである。
彼等に遺存する所のものは、氣の向ひたとき、大道を徘徊したり、天日を眺めたり、空氣
を自由に呼吸したりする自由だけである。それも勿論或何かには相違あるまいけれども、
然し生きて行くにはそればかりでは足りない。尙其上に少くも衣食住がなければならない、
若しそれを持つてゐないならば、どうしてそれを求めたならばよからうか？働くより外は
ない、卽ち誰か所有者に知慧や腕の助けを假して、その代りに所有者から適當な給料を受
ける、丁度その給料によつて生活する。

今日まで所有者と勞働者との社會的位地は右述べた通りであつた、その位地は極めて當

然であるから、近來まで誰もそれに就て愚圖々々云ふやうなものがなかつた。却て老人な
どは今でも、昔の社會に於ては主從は多く一生の間、實に仲好く暮してゐて、宛然一家族
のやうであつたと云ふことを想起して羨しく思つてゐる。

（十四）

處が五十年このかた世界の狀態が一變して了つた。主從は曾に一家族のやうでなくなつ
たばかりでなく、家庭生活以外に於ては、主從と云ふ言葉さへ用ゐられないやうになつて
了つた。商工業社會などに於ては、傭主及び職工と云ふ、或はまた資本家及び勞働者とも
云ふ、尙略して資本と勞働と稱してゐる。

現今の社會に於ては、傭主と職工は共に働いてはゐるが、然し殆ど何處に於ても相互に
一致しない。彼等は社會に於て二階級を形造つてゐる、その二階級は差別があるばかりで
なく、互に競爭してゐる、互に反對してゐる、動もすると敵になり易い。傭主も職工も各
々自分の利益ばかりを謀つてゐる。處が其の利益は相反してゐる、銘々出來るだけ自分に

大なる利益を獲得しやうと努めてゐるから、その結果として傭主と職工との普通狀態は、戰爭狀態と稱し得られるやうになつてゐる。その戰爭は可なりに激烈となつてゐる、必ずしも干戈を執つてゐると云ふ譯ではないが、然し殆ど間斷なき戰爭の狀態である。

現社會の狀態は實際此の如くである、誰もそれを拒否することが出來ない。一面には同盟罷業と反抗と過當の要求、他面には不正の壟斷と權勢の濫用、これが殆ど毎日のやうに聞見せられる。

（十五）

現社會の一般的難局に對して、革命論者は何を主張してゐるかと云ふと、彼等は此の社會的禍根＝實際大なる禍根である＝を矯正するが爲に、決定的、否、根本的矯正策を執られねばならぬと主張してゐる。してその矯正策とはどんなものであるかと云ふと、凡ての禍殃の原因は所有權であるから、彼等は所有權を排除しやうと思つてゐる。それは又何う云ふ譯であるかと云ふと、彼等の意見に據れば、今後個人としては誰でも、物の如何に拘らず、

それを自分の所有に歸したり、又はそれを我物のやうに所持したりする權利を有つことが出來なくなるであらうと云ふことである。

彼等はまた曰ふ、如何なる國に於ても土地と云ふものは國民の所有に屬してゐるものである、隨て一切の物は國民の所有に歸すべきものである。耕作地も國民の所有である。森林、鑛山、及び地上一切の富源は皆國民の所有である。地面の上に建築されてゐる一切のもの、海上に航行する一切のもの、公共的建物、個人の家屋、工場、倉庫、鐵道、船舶、電信等一切の物が國民の所有である。今日まで個人の所有して居つた所のものは、國民がそれを悉く要求し、恢復する權利がある。

又曰く、それから國民を組織する幾千萬の人民の間に、此等の物の所有を等分的にして、各自にその分前を得せしめて、貧富の差別のないやうにする筈である、何ぜなれば所有權を排除して了へば、貧富の差別などはなくなつて了つて、萬民平等となるべき筈であるから云々と。

（十六）

結局（つまり）個々の所有者からその所有物を暴略して、彼等を其家から追出し、彼等の家具や、金圓などを奪ひ、個人の所有權を撤廢して、國民のみが唯一の所有者であると云ふことなのて、革命論者は之を異日行ふ積でゐる。その爲には彼等に數（員數）と力がありさへすればよいとする、數と云ふのは國民の代表者の中に多數を占めることて、法律に依て今後所有權が撤廢されると言明すれば、凡ての財產や、家具や、不動產などがそんな國民の所有に復して了ふ。力と云ふのは、之と同時にその法律を施行する任務を負ふ軍隊が謂ふのである。さうすれば少くとも一時は所有權が除去されて了ふ。て、國內では誰も何も持たないやうになる。誰も何も持たなければ、各自（めいく）が凡ての物に對して平等の權利を持つやうになる。さうするには別に不可能の事もなければ、困難な事もない、何ぜなれば在來のものを破壞したり、顚覆したりすることだけのことてあるとするならば、それほど成功し易いことはない、確實に成功を期するには勇氣と膽力がありさへすれば可い譯てある、然し困難な

事は他に在る、卽ち建設することてある、今後の社會を統治することてある、今後の社會とは君主がなくして、萬民皆君主てあると云はれる樣な社會を云ふのてある、所有が共同てあつて、それに對しては誰も權利を有つてゐない所の社會を云ふのてある、（何ぜ共同所有に對して誰も權利がないかと云へば、それは國民の所有（もの）てあるからてある）、又各自（めいく）國民の一部分てあるからと云ふので、各自他の人々と平等の權利を有つてゐる社會を云ふのてある。

（十七）

さう云ふやうな『今後の社會』に革命論者はどう云ふやうな憲法を布く積てあらうか？そんな問題を解決することはなか〳〵六箇敷い、それにさう云ふやうな問題は澤山あり過ぎるから、今日まて本統に人を滿足させる解決は見附らなかつた。革命論者が後日何を企てるだらうか？又その企業が成功するだらうか否（どう）かは、追ての問題て、後になつて分るであらう。

但今まて人の見て來たことは極めて單純（たんにゆん）て又極めて自然（あたりまへ）てある。革命論者は他人の物を

暴略したり、その所有物を掠奪したりしやうとする場合には、いつも所有權を除去しやうとしてゐる、さうするまでは彼等も相互によく一致するけれども、一朝彼等輩らが所有主となつて、何かを自分自身の所有物にしたときには、忽ち自分の意見を豹變する、少くも實際に於て今迄と違つた意見を有つやうになる、卽ち自分の持つてゐる所の物を飽迄も防禦する、時には激しく防禦する、それで以前何にも所有して居なかつた者が、新らしく所有者になるときには、大抵何處に於ても、他の人々に對しては、從來の所有者よりも尙更に殘酷になる。

勿論所有權と云ふものは、所有者がそれを濫用する時には、壓制にも類するやうな冷酷を呈することがある、實際さう云ふことが時々あるけれども、然し所有權を除去して了ふときには、尙更にそれよりも大なる損害を社會に加へるやうになる、何ぜなればさうなると又々絶對無政となり、隨て社會滅亡の原因を來たすからである。

（十八）

革命案によると、社會を改造するが爲に除去しなければならない第四の壓制は「家庭」である。家庭が社會の壓制であると云ふことは、恐くは未曾て口にせられたことがなかつたであらう。

家庭と云ふものを、世界開闢以來存立してゐるものに就て考へて見るに、家庭は人に義務を負はしめるものであると、誰もさう思つてゐる、然しその義務が人に取つて壓制となつたり、人を奴隷にしたりするものであるとは、誰もさう思はない、設令さう思ふ者があるとしてもそれを敢て口に言顯はす者はないであらう、何ぜなれば家庭に於て「義務と幸福」とは相互に衝突しないばかりではない、却て家庭の義務を盡さないで、幸福を宿してゐるやうな家庭は恐くは一つもあるまい。それと同じく幸福でなくて、義務を盡してゐる家庭も亦一つもあるまい。その證據を見たければ、此點に就て實際之を經驗した者に訊いて見れば一番早分りてある、さう云ふ實驗者は自分の家庭生活に於て、義務を忠實に盡した爲に幸福となることを妨げられたと、果して言ふであらうか、否であらう。

此の問題に就て日本語で書いた面白い書物がある、題して「家庭の王國」と云ふ。家庭の王國とはよく言つた言葉である。實際規則的に立てられてゐる家庭は一種の小王國である、丁度王國が一種の擴大した家庭であるが如くてある。家庭にも王國の如く王もあり、皇后もあり、人民もあり、法律もあり、政府もある。凡ての人々が其處に一緒に働いてゐる、銘々自分の思ふ儘に働いてゐる、時々苦いこともあるが、然し安寧秩序が宿つてゐさへすれば、人は皆仕合てある。

（十九）

革命案によれば、國王もなく、王國もなかるべき筈てあるから、家庭も亦存立し得べ筈はない、それはどう云ふ譯てあるかと云へば、家庭と云ふものを今日まで存立して來たのに就て見るに、自家固有の憲法と法律と首領と政府とを有つてゐるから、其處には自由を束縛するものがある、所謂『社會的壓制』がそれてある、此の理由によつて家庭を消滅しなければならないと云ふ。

然らば如何なる點に於て家庭は自由を束縛するかと云ふと、それを明に說明するには、玆に少しく詳しく研究して見なければならぬ必要が生じて來る。それはちとデリケートな、言ひ難ひ問題てあるから、吾人はそれを愼重に研究して見たいと思ふ。

先づ第一青年男女が相共に家庭を作る前には、自分の傾癖に從ふことは出來ない、婚姻を結ぶまては、彼等は待つてゐなければならない、若しそれ以前に我儘勝手なことをすれば、評判名譽を失ふの恐れがある、否、一生を誤る憂がある。それから結婚して夫婦が一緒になれば、爾後相互に全く縛られて了ふ、幸運のときも、不運のときも、健全のときも、病氣のときも、死ぬまて相互に變らぬ貞節を盡して行かなければならない。

勿論或る事情に依つて、民法は別居及び離緣を許すけれども、裁判官が彼等相互に別れて暮すことを許しても、彼等にも全く消えて了はない責務が殘つてゐる、それから殘念が殘つてゐる、それは殆ど一生涯續いて行く。

次に子供を育て、職業を授けて、その行末の安全を計つてやるには、父母に如何程苦痛

や、苦勞や、心配などを忍ばなければならないか分らない、否寧ろ父母は心配のない時は一刻もない、その苦勞は死ないいうちは絶えない。

（二十）

子供の方から見ても、家庭に於ては子供は父母よりも束縛されてゐないと謂はれ樣か？如何なる家にも一種の規律と云ふものがあつて、子供は是非ともそれを守らなければならない。父母には權利もあれば、我意と云ふものもある、子供はそれを忍ばなければならない。何ぜなれば子供に性癖（くせ）があるとすれば、父母にも性癖（くせ）がある。處が子供は父母に對しては、尊敬と服從と扶養を一生の間盡さなければならない。

無論家庭に利樂のあることは拒否ずべからざる事實であるけれども、然しその利樂は、自由を價にしなければ買へないと云ふのは、餘り高價（たかす）過ぎるではあるまいか？とは革命論者の常に言つてゐる事であることを忘れる筈てはない。處が革命論者をして言はしむると、どんな貰い賓と雖、絕對的の自由がなければ、何の役にも立たないと云ふのてある。

（二十一）

それは兎も角革命論者が家庭（卽ち在來のやうな家庭）を破壞して了へと云ふならば、その代りに何を立てる積てあらうか？此點に關する革命案なるものは甚だ不條理千萬てある、否、奇怪至極てある、話さぬ方が却て優（まし）てあらうけれども、然し此案は今日ては多くの國に於て殆ど全部實施されてゐるから、話なされねばならぬ必要がある、卽ち人と云ふものはどれほど狂暴になるものてあるかを示さんがため、否寧ろ、虛僞の原則を精神（こゝろ）に抱藏してゐると、その原則の爲にどれほど極端に奔つて行くものてあるかを示さんが爲め、是非とも話さなければならぬ必要が生じて來る。

詰り一言を以て革命案を約めて云へば、男女の結合は自由てあると云ふに歸する。年齡、場所、身分の如何に拘らず、男女の自由と云ふものを妨げる筈てはない。最近の進步した革命論者の中には、男女を都鄙の共有財產のやうに見做してゐる者があつて、その財產は、各個人の所有てはなく、どんな人でも勝手にそれを使用し、享有することが出來ると云ふ

やうな議論をなしてゐる。

同論者の説に據れば、婚姻制度の行はれてゐる國に於ても、婚姻と云ふものは他の普通の契約と毫も違はずして、二人の間に、その利害若くは娯樂のため、自由に取結ばれるものであるから、契約が破れれば、婚姻が破れた譯であるから、そのとき二人は自由に夫婦別をするまでゞある、元々自由に結婚したものであるから、離緣するときも自由であるべき筈であると云つてゐる。

然らばさう云ふやうな結婚によつて、二人の間に子供が生れたならば、それをどうするかと云ふと、彼等の説は恁うである、父母はそれを世話するに及ばない、社會がそれを教育する筈である、子供は社會の物であるから、それが當然である、さながら子供の方で父母を知らなければ、父母の方でも子供を知らないと云つたやうに論じてゐるから、將來の社會に於ては—但そんな社會が存立するとすれば—人間は禽獸にも劣つてゐるであらう、何ぜなれば卵を砂の上に遺棄して伏卵しないと云はれてゐる駝鳥を除くの外は、自分の子

供を育てずに放棄して置くやうな禽獸は一疋もゐないからである、どんな禽獸でも子供が一本立になるまではそれを育てゝゐる。果して然うだとすれば、今日のやうな文明進歩の時代に於て、人類が斯くまで退歩の極度に墮して行くと云ふのは、人類の大なる恥辱ではあるまいか？

（二十二）

革命案に於て理解のし難い所のことは左のことである、革命論者がいくら國家と云ふ思想及び名稱までをも取除かうとしても、人が誰でも天性自然に其の生れた所、其の住みなれた所、其の從屬してゐる所（即ち國家）に對しては特別の愛着心を抱いてゐるのに、それを奪ひ取らうとする事である。何ぜなれば自分の國となると、いくら貧弱な國でも、又他の國のやうに名高くなくても、自分に取つては世界無二である、その國は自分の一番愛して來た所のもので、又いつまでも愛して行く所のものである。然るに革命論者の中では、人の心からも、愛國の念を抜き去らんことを主張して

ゐる一派があつて、而も其派は今では既に餘程多數になつてゐるのは、一體何う云ふ譯であらうか？之を解答するには、先づ第一國家（パトリー）と云ふ言葉には二つの意味のあることを記憶しなければならない、第一は父の家と其家の在る故郷（ふるさと）を示し、之を小國家（プチ・パトリー）とも云ふ。第二はさう云ふ家を以て成り立つてゐる國を指す、例へば日本國と稱するが如き即ちそれて、之を大國家（グランド・パトリー）と云ふ。

故郷とか、父の家とか、若くは單に家と云ふときには、老父母、祖先、家名、家傳及び祖先より子孫に傳來する德望等を自然想起せしめる。處が革命論者には、そんな紀念、そんな家傳、そんな家督などは、考へるも厭だと云はれてゐる。何ぜなれば德望のある家庭の相續人ならば、面目を保つが爲には、自分も有德者となつて、父祖に酷肖してゐなければならない。それて歐羅巴の舊社會には「貴族は貴族らしく」と云ふ諺があるのてある。處が有德者とならなければならないと云ふ事を、革命論者は承認しない、それは彼等の享樂しやうと思ふ絕對的の自由に反對するからてある。乃て彼等は絕對的に自由となるが

爲に、國家を撲滅しやうとするのてある、先づ第一小國家をなくしやうとする。それから大國家に對しては、苟も忠誠にして義俠のある國民ならば、それを愛さない者は一人もない、其國の力や、富や、隆運などを誇りとしないも一人もない。ここまては誰ても同感てある、がそればかりてはない。

國家を富ましめて大きくするには、そこの住民が勇敢にして且忠誠てなければならない。國を強くして榮えしめるには、その國民が忍んだり、戰つたり、場合に依つては、國の爲に自分の財產も、血も、生命までも犧牲に供する覺悟てなければならない。國に殉ずるとも云ふのが、卽ち眞の愛國心てある。然し玆に於て革命論者は考へる。若し其國に於て名譽にもなり、利益にもなるやうな位地を占めて、國に盡す上に於て認められ利榮を、自分等の爲に利用すると云ふことならば、彼等は無論それを希望するばかりてなく、さう云ふやうな位地をどれほど渴望して競爭し合ふか分らない。

乍然自分等の利益を國家の利福の爲に犧牲に供し、國家を存立せしむるがため、又國家を

隆盛ならしめるがため、忠誠を盡して、苦を忍んだり、殊に生命を賭したりすると云ふやうなことならば、彼等は早速身を隱し、危險を避けて、吾身の安全を保ち得られる限り屹度さう云ふやうな卑怯なにげかたをする。若又自國の敵と結託して、吾身の儲けとなり、所謂敵の金で身を富ましめることが出來るやうなことがあれば、彼等は必ず國を賣り、同胞を死地に陷ゐれて、國家を羞辱と滅亡の淵に沈み入らしむることを躊躇しない。

現に今次の大戰に於ても、一面には高崇なる忠誠や、愛國的勇擧等の立派な手本が多く示されて、世界中の人々をして皆感心せしめたにも拘らず、他面には同じ國に在つてさへ利己主義や、卑怯卑劣の行爲や、賣國沙汰などが少からず見受けられたではあるまいか、此の名高い大戰の歷史にも、永く天下後世に汚名を遺すやうな人間がゐるではあるまいか？

（二十三）

今玆で以上述べた所を簡單に約めて見やう。

兎に角革命案なるものは極めて明瞭である。その目的とする所は、凡ての國に於て—野蠻の國に於ても—昔から今日まで存立して來た社會を破壞しやうとするに在る、そして全く違つた土臺に基立する他の社會を以てそれに代へやうとするのである。

舊社會を破壞しやうとするには、先づ第一着にその社會の今迄基立して來た五大柱石を倒さなければならない。五大柱石とは何であるかと云へば、道德、主權、所有權、家庭及び國家が卽ちそれである。

但革命論者は之を『社會の柱石』とは言はない、『五つの迷信若くば先入』と云ふ、彼等の議論によれば、恁うやうな迷信若くは先入て以て、世界中の人類は今日まで奴隸視せられたり、暗愚にせられたりして來たのであるから、今後は世界の人類をそれ等より解放しなければ-らないと云つてゐる。これが卽ち彼等の所謂革命の事業である。

（二十四）

恁んな革命案なるものを述べてゐるのを今日の人々が聞見したならば、餘り極端であり又餘り不條理であるから、初めは容易に信じないであらう。今日のやうな文明日進の世の

中にそんな馬鹿々々しいことを案出する程人間が野蠻になれるであらうか、それ程まで常識を失ふやうになれるであらうかと、誰しもさう思ふであらうけれども、然し今日世界中に行はれてゐる事實を考察して見ると、否、實際歐亞の諸國に於て、斯様な革命案が今現に施行されつゝあるのを見ると、いかさまさう云へばさう云ふ案があると信じなければならなくなる。

無論國によつて此案の施行されてゐる程度が違つてゐる、何處も同じやうに進歩してゐると云ふ譯てはない、例へば露西亞などに於ては、非常に進んてゐるけれども、獨逸や葡萄牙あたりなどては、それほどまでには進んてゐない、然しながら概して言へば、今ては同じ革命運動が殆ど凡ての國民を驅り立てゝゐると云ふことが出來る、その譯はと云へば、同じ思想がどこに傳播しても、大抵いつも同じ結果を生ずると云ふ自然の理由に依るのてある。地上にはいろ〳〵の民族が澤山ゐる、白人種もあれば、黃色人種もあり、黑人種もあれば、赤人種もある、然しその皮膚の色の如何に拘らず、結局人類は一つしかない、二つ

はない、それ故革命はあり〳〵と世界を一周し初めて、同じ思想を世界中に傳播するに作れて、革命の氣運を促進して行くのてある。今日吾人の眼に映じてゐるのは世界的革命の端緒てある。

（二十五）

それにも拘らず今日ては世界中何れの國に於ても學術の進歩と智識の發達のことばかりを話してゐる、然しながら智識の發達と毎日のやうに新聞記事に見えるやうな殘逆を（例へば露西亞に於て見受けられるやうなものを）何うして結付けて聯想する事が出來やうか？彼の過激派の行動と現代科學の進歩との間には、何う云ふ關係があるてあらうか？詰り革命と科學との間には、何う云ふ關係があるか？それをよく知悉した上、明にそれを示さなければならない。

抑々革命は科學から生れて來たものてある、科學が益々進歩するに從つて、革命も亦進歩する、論理的にさうてある、語を換へて言へば、結果が原因より出づると同じことてあ

る。然しそれはどう云ふ科學を指すのであるかと云ふと、丁度現代の科學を指すので、現代の科學と云ふのは、古代の學問と區別する爲にさう云ふのである。實際世には二種の學問があつて、二種各々其の性質を異にしてゐる。現代の科學は別名之を超絶科學とも稱してゐるが、それは他の一切の科學に超越してゐるからと云ふのである、少くもさう云ふ風に揚言せられてゐるからである。凡ての學問の中に一番感心せれてゐるのは、一番解し難いからであるが、本當の名稱を云へば、新哲學である。

然らばどうして新哲學が革命に導いて行くかと云ふに、そこが面白いので、その問題は周到綿密に研究する價値がある。吾人はそれを一つ試して見たいと思ふ。

（二十六）

革命の原因は何であるかを根底から説明しやうと思へば、人性それ自らの裡にその始源を遡究しなければならない。それは何う云ふ譯であるかと云ふと、苟も少しく心理學の知識ある者ならば、直ぐにそれが分ることであるが、元來吾々人間は誰でも學問の上で學ば

なくても、己れ自身の經驗によつて、人間と云ふものは皆二種の性を以て成り立つてゐると云ふことを辨へてゐる、その一を理性と稱し、他を感性と稱する。二性各々それ〳〵傾癖を持つてゐて、その傾癖は互に相異つてゐるばかりでなく、多くは相互に反してゐる。

人は此二性の間に立ち、或時は右に引かれ、或時は左に引かれる。謂はゞ始終岐路の入口にゐるやうなもので、その二性の中何れなりとも自分の氣に入るものを選ぶことが出來る、選ばるればそれが主公となるのである。然しながらその選ばれる所のもの丶異るに隨て、その歸着する點の異るのも亦明である、詳言すれば感性に從ふと、理性に從ふとによつて、結果はおのづから異つて來る譯である。例へば同じ家庭に二人の兄弟があつて、一人は右の道を選び、他の一人は左の道を辿らうとすれば、その二人の間にどう云ふ相違が生じて來るかは誰でも知つてゐる、前者は親孝行て幸福（しあはせ）であるが、後者は放蕩息子で不幸である。

都市又は村落のやうな多くの人々の一緒に住んでゐる所には、利己主義て、嫉妬深くて、

不義て、盜癖のある隣人の側に住んでゐるのと、正直て、親切て、他人を重んじ、その權利をも尊重して、己の他人を過すること、人の己を過せんことを欲するが如くにしてゐる人の側に住んてゐるのとては、大變な相違が生じて來ると云ふことは、誰ても知つてゐる。義しい人の側にゐるときは、安心して住んてゐられる、何にも心配なことはないが、盜人などの側に住んてゐた日には、心配て堪らない、始終警戒して、正當防衛の爲に自身の用心までもしてゐなければならない。してそれは何う云ふ譯てあるかと云ふと、他てはない、一人は理性、簡單に言へば、理に從つてゐるし、他の一人は感性、簡單に言へば、情に從つてゐるからてある。詰りは理と情、これが凡ての人々を司配してゐる二種の勢力てある。

（二十七）

吾人は今迄ては社會のことのみを論じてゐるのてあるが、如何なる社會の目的ても、その組織分子（成立員）たる人々に、秩序と安寧とを確保するに在ることは、確かなことてある。それ故如何なる社會に於ても、凡ての人々をして理に從つて生活して行かれるやうに計らはれてゐる、それに人々が情の爲に外れたり、極端に走つたりして平和を紊亂しないやうに、又國民の安寧を危くしないやうに、必要な豫防法はチヤンと講ぜられてゐる。その豫防法と云ふのはどんなものてあるかは、誰も知らない者はない。先づ如何なる社會に於ても、特別な學問があつて、それは學校ばかりてなく、家庭にも教へられてゐる、それは倫理學又は修身と稱する所のものてある、此の學問は全く特殊的のものてあつて、凡ての行爲を揭げて、之にそれ〴〵適當の品定をなして置く、卽ち善行爲とか、惡行爲とか、又は高尙な、美大な、名譽な行爲だとか、野卑な、陋劣な、不面目な行爲だとかと云ふやうに。

今日までは正理に適合してゐる行爲を名譽なる善行爲と見做し、正理に反して、情からのみ起つて來る行爲を恥づべき惡行爲と斷じて來たのてある。

斯樣な善行爲惡行爲の區別に從つて、如何なる社會にも法律と稱するものがある、これは國民に其の避くべきものと行ふべきものとを明に示す所の精確な法則てある。又其の法

律を守らせるには、法官とか、警官とか、裁判官とか、其他いろ〳〵の行政官がある。

尙又如何なる國に於ても、法律や法官などの外に、習慣と公德心と云ふものがある。乃て法律では規定されてゐないけれども、習慣によつて守らなければならないと云ふやうな事が澤山ある、又法官には急迫されないけれども、公德心によつて恕されない罪過が澤山ある。詰り自由を束縛するものは、どこにもある。

（二十八）

結局煎じ詰めて言へば、壓制は唯だ一つしかない、卽ち人々が今日まで善と惡との間に又稱讃すべき行爲と其他の行爲との間に定めて置いた差別がそれてある、斯く定めたのはその行爲が理に適つてゐると否とによるのてある。その行爲の原因が理てあると情てあるとによるのてある。

之に就て革命論者は何を主張するかと云ふと、その主張する所は、善惡行爲の差別を一切撤廢する筈てあると云ふのてある。其譯は同じ一人の人が理性と感性との二種の性から成立つてゐるならば、何ぜ其の二種性の中の一つばかりが自由て且いつも主公となり、他の一つはいつも之に服して奴隷になつてゐなければなるまいか。情と理は平等てなければならない、一方が他の一方よりも自由てあり、特權があると云ふ理窟はない筈てあると云ふのてある。

そんな譯て革命論者は社會に於てばかりてなく、人それ自らの中に於ても根本的の改革を行はうとするのてある。それは何う云ふ譯てあるかと云ふと、今日まて社會に於ては、主權若くは統治權と稱してゐた所のものは、君主と稱する國家の元首の手中に在つた。所謂「頭が統治してゐたのてある」、これは昔から唱道されて來た道てある。

處が、新らしい社會には然うてなくなつた、主權は「頭」になくして、「足」に在る、卽ち民衆が討議したり、決定したり、命令したりする、昔君主とか首領とか稱して來た者は最早從ふより外はない、「君主」は人民てある、統治する者は民衆てある。

人それ自らに於ても同じことてある。昔は正理が統治してゐた、そして人々は之を自然

の事と思つてゐた、何ぜなれば精神の目は理性の中に在るからてある。その爲に情が滅却された譯てはない、單に正理によつて緩和され、調節されたまてゝある。こんな風にして慨はしい錯誤や、人に有害となる事變などの多くが生きた一生の中に避けられたのてある。

（二十九）

處が、今日ては理情平等と云ふことが公宣されて、情も亦自由てあると言明されたから、理は最早之に命令する權がない、て、情が自分の望む方に奔つて行くとき、理はそれと一致しなければ、默從するより外に道はない。さうなつた日には結局どうなるかと云ふと、無論手が頭を導くときのやうな事になるのが、自然のことてある。卽ち手頭相迷つてどつかの穴に落滅して了ふのが必然の數てある。それと同じく理に從はないて、情に從ふやうな人々はみんな間違なく滅びて了ふ。

現にさうした例は毎日のやうに見受けられる、然るに革命案によれば、一番大切な實行要件は、凡ての人々にその好むまゝに行ふ自由を許與する事てある、語を換へて言へば、「情

の自由を與へる事」てある。

かうなるといろ〳〵の抗議が、普通の常識を標榜して、四方八方から起つて來る。

先づ第一、人を司配すべきものは情てあると云ふのは、一體全體誰が言つたのてあるか。寧ろ却て人の上には、人の造らない法があつて、人はそれを守らなければならないと云ふことは、昔から教へられてゐる所てはあるまいか。處て、法を守ると云ふことは、情に從つて行はれることてはない、情は盲目てある、自ら知らずして行動するものてあるから、法を守ると云ふことは、理に從つてのみ行ふことてある。その譯は理には目があつて、その行ふ所を知つてゐるからてある。之に對して革命論者はどんな答辯をするかと云ふと。

彼等は決してそんなことてひるむやうなものてない、彼等は根本的に出て、法そのものを撤廢して了ふ、法が撤廢されると、最う自由を妨げるものがなくなつて了ふのてある。これは實に簡單明瞭てある、如何さま根本的てある。乃て絕對自由になつて了ふのてある。然し人は言ふてあらう、人の造らなかつた法が、人の上に位してゐるのに、それを撤廢すると云ふこ

とは、可能的であらうかと。普通の常識と従前の學問によれば、無論それは不可能である が、所謂新哲學によれば、それほど易々たる事はない、所謂新哲學はそれに就てどんな議論を吐てゐるかと云ふと、次の通りである。

元來私の承認しない物は、有らうと無からうと、そんなことは大した問題ではない、私に取つては無いと同樣である。普通學生間に行はれてゐる話から例を擧げて見ると惣うてある、君は神が存在すると信ずるから、君に取つては神は存在するだらうけれども、僕はそれを信じないから、僕には神なんか在りやしない。これを以て觀ると、人の自由を妨げるものを撤廢することは、どれほど易々たる事であるかゞ直ぐに分る。法に對してもかう云ふやうな論法を用ゐれば、直ぐに事が決して了ふ、卽ち君が本統に心から、絕對、至上、普遍の法があると信ずるならば、君はその爲に君の望みの儘に行ふ自由がなくなつて了ふ譯であるが、僕なぞはてんからそんな法の存在を信じないから、僕の爲にはそんな法はありやしない、隨て僕は全然僕の自由を保持してゐる。

それを制限するものがあると云へば、タツタ一つある、それは何であるかと云ふと、僕を阻止する不可抗的障碍である、若くは僕よりも强大な父は僕よりも狡猾な人間があつて、僕を抑制することである。

最も進歩してゐると云ふ新哲學を奉じつゝある革命論者は、實に斯樣な議論をなしてゐる、て、その議論の歸結は次の通りである。

「吾等は最も强い者である、少くも最も大膽な者である、故に宜しく勇進邁行する筈であろ、而て吾等は世界の覇王となるであらう」と。之に對しては何と答へたならばよからうか？彼等の議論は實に奇怪千萬である、不條理至極である、隨て彼等の言動も亦忌む可く厭ふ可きである。何ぜなれば設令法の存在を否定すればとて、それで法がなくなる譯ではない、早い話が、彼の天に輝いてゐる太陽が無いと言つたとて、その爲に太陽がなくなる譯のものでないと同じことである。處が、その天に輝いてゐる太陽よりもモツト明かな事は、善行爲と惡行爲との差別である。

（三十）

然しながら革命案を全く實現しやうとするには、どうしても善惡の差別を撤廢し、人の精神裡からその差別觀を除去して了はなければならない、何ぜなれば人が時々刻々惡を行ふことを恐れてゐた日には、一生の間奴隷のやうに暮して、絶對自由を享有し得ぬであらう。

そんな恐怖心や、憂慮を全然除去して了ふが爲に、革命論者は左の如く論證するのである、元來善惡などの差別がないばかりではない、ある能はざるものであると。それは又どう云ふ譯であるかと云ふと、最も進歩した科學によれば、「唯一の實在は物質である」、人の心中に於ても、身外に於ても、天に於ても、地に於ても、物質より外に何にもない、隨て何にも恐るべきものはない、何ぜなれば物質以外にも以上にも何にもないからである。新科學の極致は實に以上述ぶるが如くである。

乃で、若も人に於ても物質ばかりであるとするならば、その行動に對しても、物質の生じ得る所のもの、外に、何にも請求することが出來ない譯である。然らば物質それ自らは何に

が出來るかと云ふと それは吾々が毎日目擊してゐる。物質は自然盲目で且無意識であるから、その傾きと云ふやうなものに從ふ、卽ち引力若くは排力に從つて、或は近づいたり或は遠ざかつたり、或は化合したり、或はいろ〳〵に變じたりする、けれども物質がどんな形體を取らうが、又はどんな結果を生じやうが、人はその爲に譴責を加へたり、又は稱讃を呈したりしやうと思はない、そんな事は誰も今迄考へた者はない、餘り馬鹿げた事である。

それに若し人にも物質ばかりであつて、物質以外に何にもないとするならば、所謂思考だとか、愛情だとか、意志だとか、又は情などと云ふものも、無論凡て皆物質の運動とか又は化合とか云ふやうなものに過ぎなくなる譯である。そして物質の運動又は化合には、善だとか惡などのあるべき筈のないことも亦明である。さうすると物質によつて生ずる結果に外ならぬ行爲を、善行爲とか惡行爲とか稱するのは、無意味なことになる、人が若も本統に物質のみであるならば、その行爲に就て責任なぞある筈はない、宛も上から轉がり落る石が、途中にいくら人を倒しても、責任のないと毫もかはらない、人も石も同じ筆法で論

ぜられる譯てある。

それだからして現今の教育には一種の矛盾が起つて來るので、その矛盾はまだ十分認められてゐない、卽ち一方に於て哲學先生は、革命學によつて、宇宙間にあるとあらゆるものは唯だ物質のみてある、萬有皆物質であると說いてゐる、萬國のプログラムは皆その通りてあつて、さうてないと進步に後れてゐると云ふ非難を受ける、他の一方に於て道德學者は各國民の經驗と常識とによつて、天下の靑年子弟に正しい德の道を敎へ、極力その道を辿るやうに慫慂してゐるが、考へて見ればそれは可笑な事てある、馬鹿らしい事てある。

哲學先生と道德學者が、その高敎を垂れんが爲に講座にのぼる前に、先づ第一お互に話合をつけたらよさゝうなものだ。お互に學者のことてあるから、お互に矛盾してゐると云ふ位は直ぐに解りさうなものてある、哲學先生が道德學者の骨を折つて建設しやうとしてゐる所を蹂め破壞してゐる位のことには直ぐ氣がつくてあらう、その譯は萬有皆物質てあつて、宇宙間にあるとあらゆるものは唯だ物質のみてあると確信してゐる人々に向つて、

道德を說くなどゝ云ふのは無駄なことてある、餘り理窟が解らな過ぎる。彼等には道德と云ふ言葉が無意味である、實在なき理想に過ぎない。無論書物に就中演說には、屢々それを今日でも述べてはゐるが、然しそれは人の腹を肥さず、懷中をも滿たさずして、ホンの空言に過ぎないから、一般の人々はそれに毫も重きを置かない。

（三十一）

それだから眞面目な人で、家國の將來を慮つてゐる者は、國中で屢々「一體全體どうなるのてあらう」と云ふ嘆聲を放つてゐる、それは無理もない話てある。然し學問は每日進步して、道德はどこの學校ても熱心に敎へられてゐる、それにも拘らず道德は益々衰へて行く、遠からずして滅びて了ふかも知れない。

然し繰返して言ふが、それは何にも珍らしいことてはない、却てさう云ふ風にならないのが珍らしいのてある。何ぜなれば敎育が、上から下まで、唯物主義てあるのに、道德の衰滅して行くのを驚くのは。人の身體から靈魂が奪ひ取られたとき、その人の死んて了ふ

のを驚くと同じやうなものである。靈魂がなければ死んで了ふのは當然である。それと同じ譯で、唯物主義の教育から論理的に出て來るものは、道徳ではなくして、丁度道徳の反對である利己心であると云ふことは、經驗の明に證據立てゝゐる所である。

處で、利己心が、最も優勢にして、天下何物もそれを制御することが出來ないやうになるときには、自然世は革命になつて了ふ、その理由は至極簡單である。

實際利己心はどう云ふことを言つてゐるかと云ふと、惣う云ふことを言つてゐる、「私も亦天下に覇を唱へたい、私は私と意見を同うする者と共に團結すれば優に勢力を占めることが出來る。我々同志は相結束して凡て我々の企業を妨げるものを傾倒する筈である。その爲には、場合によつては、現社會をも破壞しなければならない、それから我々の覇を唱ふべき他の社會を建設しやうぢやないか」と。

惣う云ふやうな革命案が今日吾々の眼前に、イヤ、吾々の身邊に、過激派から實現されてゐるのを、吾々が實地目擊耳聞しつゝある。過激派の企てゝゐる殘逆と慘禍と醜態とを聞

見して喫驚しない者は恐くは一人もあるまい。

そんな者は人間であらうか？猛獸ではあるまいか？と人は驚くであらうが、實は猛獸でも何んでもない、革命者と云ふ者である。彼等は革命のプログラムを中途に止めずして、極端まで實行して行くのである。現今の學問、所謂新哲學、新科學なるものによれば、何にも證實すべき事でない、答へやうもないのである。げに萬有皆物質であるならば、又彼等も同じく物質に過ぎないと云ふことが事實であるとするならば、彼等は毫も誤つてはゐない、その證據に彼等の代りに何かの物質的の力、例へば颶風だとか、激潮などが其勢を逞うするときには、矢張屹度彼等の通りに行ふであらう。そして其等は他の於強い力によつて止められるとか碎かれるとかしない以上は、必ずその通り續いて行くであらう。

（三十二）

〃 今世界に眼を放つて見ると、眞に寒心す可きものがある、何ぜなれば取分け二三年この方た革命は潮の如く世界各國に汎濫して、抗抵すべからざるほどの勢を逞うしてゐること

は、當眼の事實である。處て、此の恐るべき禍が全地に擴まるならば、どう云ふ事になるであらうか？無論恐ろしい嵐が豐饒膏腹の土地を吹き荒すと同じやうな現象になる、即ち凡ての建設物を荒したり、倒したりして、徒らに頽敗と殘址とを遺すまでゞある。革命の行ふ所もそれと同じてある、暴逆、紊亂、强奪、殺戮、放火、無政などは、皆是れ革命の昔から行つて來た所て、今日ても尙それを行ひつゝあつて、世を慘禍と驚愕と恐怖とに滿たしつゝあるのてある。

然しながら此の如き大禍に對して何か喰止める策はあるまいか、否寧ろ此の恐るしい禍が全く國內に侵入して之を荒す前に、之を避け之を斥ける何かの方法はあるまいか、語を換へて言へば、革命がまだ脅威してゐるとき、即ち始まつたばかりのときに、その革命と革命の必然的結果なる慘禍とを避けやうとするには、何う爲だならばよからうか？

今日世上盛んに論議されてゐる凡百の問題の中に、革命問題ほど重大な問題はあるまい、何ぜなれば世界の將來の爲にも、是れほど重大なものはないからてある。

抑々人が何にかの病氣て苦んでゐるとき、その病氣から癒されやうと思ふときには、何うするてあらうか？或は何にか流行病とか傳染病とかに罹されたいと思ふならば、何うするてあらうか？その時には先づ第一其の病氣の本源を究める、即ち何處から起つて來るか？如何にして傳染するかと云ふことを調べるのてある、病の原因が分つたときには、それに適當な藥を投ずる、即ち病原を知つて、その病原を取り除くやうにすれば、病氣は自然に直る、少くもそれ以上に傳染しない。

處が、革命即ち今日世界に行はれてゐる革命を見るに、之を遠からず全地球上に傳染せんとしてゐる世界的流行病に比することが出來る、實際この比較は事實に適中してゐる。最近西班牙風と稱するものが殆ど世界中の國民を見舞つたが、これは今や將に殆ど文明國一般に波及せんとする社會的流行病とも云ふべき世界的革命の好箇の表徵てはあるまいか。

（三十三）

處て、此の世界的病氣の始源は何てあらうか？

前にも論じた通り、今日の革命は學問から生れて來て、學問によつて世界中に傳はつてゐるのである。

然しその學問はどんなものであるかと云ふと、それは現代の學問又は新科學とも稱する。新科學は畢竟(つまり)那邊に存するかと云ふと、吾人の玆に論じてゐる見地卽ちその新科學が社會の秩序に接觸してゐる點から見ると、之を二つの原則若くは二つの基本的命題に歸することが出來る、左の通りである。

第一、我から見て、自分が在ると信じてゐるもの〻外には何も無い。

第二、人の心中にも、身外にも、天にも、地にも、存在してゐる實在は唯だ物質ばかりである。

此の二つの命題を出發點のやうにして、それを科學的教育の基礎にするときは、其處から自然に（論理的に）革命が出て來る、丁度川が其源から流れて來るやうに出て來るが、但だ其の違ふ點と云へば、科學は今では世界到る處に普及してゐるから、其處から出て來る所の革命は洋々たる川ではなくしておそろしい急流である、それが日一日と大きくなつて、地上一切の物を荒さうとしてゐる、實際それを阻止するものがなければ、荒して了ふに相違ない。

玆に重大な問題が起つて來る、それは他でも莫いその革命の急流に對しては、どう云ふ堤防を築いて、それを喰止めたならば可からうか？世界のどこかにさう云ふ無政の汎濫を喰止める程の力はどんなものであるだらうか？と云ふ問題である。

前に述べた所に由て觀れば、此の問題を解決するのは左程六ケ敷いことではない。先づ第一革命が學問から生れて來ると云ふが、その學問は一體どう云ふ學問であらうかと云ふことを究めて見なければならない、何ぜなれば世には古い學問と新らしい學問との二つある。乃て、社會に對してその二つの學問がどう云ふ點に於て違つてゐるであらうか？又その新舊二種の學問によれば、世界を支持する土臺卽ち原則は何であらうかと云ふに、その

原則は最早たび〳〵繰返して言つた積であるが、大切であるから、モウ一度言つて置かう、先づ古學の方から始めやう。

第一、個人の上にも、國民の上にも、至上普遍の大法があつて、その法には個人國民の差別なく服さなければならぬ、又實際服してゐるのである、それを吾々は信ずる。

第二、人の心の中にも、人の上にも、物質と異なる他のものが在る、それを吾々は信ずる。

次に新學の方を記さう。

第一、吾々は吾々の守りたいと思ふ法の外、他に何等の法をも認めない。

第二、人の自由は絶對である。世と凡て世にある所のものは皆最も強い者か若くは最も狡猾な者の有(もの)に歸(な)る。

(三十四)

斯樣に新舊二種の學問の教へる所を併記すると、詰りは諾否の問題となつて了ふ、即ち人には君主があるか、又はないか？吾々はそれに對する諾否の答の外に何をも求める必要はない、その答によつて、どうすればよいかゞ直ぐに分つて來る。有識者に對しては『原則』を提出するだけで澤山である、有識者ならば己れ自ら其處から結論を引き出すことが出來る。

古學によると、物質以外にも尚他のものが存在してゐると云ふ、即ち諾である、然し新學によると、物質の外何にもないと云ふから、否の方である。そして今では世界中どこでも『文明世界』と稱せられてゐるものは、二つの教育に分れてゐる。一方は萬有皆物質であると云ふ原則より出發し、他の一方は、物質の外にも、其上に精神と云ふものがあると云ふ原則より出發する。それ故一を無神主義と云ひ、他を精神主義と云ふ。

今日では世界中に此の二つの教育が互に相反してゐる、戰爭してゐると言つても可い。そして世界中どこでも此の兩說の一勝一敗によつて、革命が一進一退する。

無神主義の教育の自然の結果(論理的結論)は革命である、そして丁度世界的革命の爲に之を到る處に普及しやうとするから、無神主義の教育は世界中に傳播されてゐるばかりて

なく、立派に編制されて國家の一制度となつてゐる。此の意味に於て殆ど何れの國に於ても官學(官立教育)と無神教育は同じてある。何ぜなれば學科目ても、官學の方針ても、教員及び民間に下す命令までも、皆無神主義の意味によるからてある。

果してさうだとすれば、革命が日一日と範圍を擴めて、社會がその爲に動搖されるのは、當然の事てあつて、それを驚くのは、家に火を放つて、其の家の燒けるのを見て驚くやうなものてある、或は家の土臺を引拔いて、其の家の傾倒するのを見て不思議に思ふと同じことてある。

（三十五）

約めて言ふと、「無神主義が卽ち敵てある」。現社會の禍根は、少くとも主なる禍根は教育上の無神主義てある。社會を滅ぼす恐ある病原は卽ち其處に在る、隨て此の禍根に對する根治策は明かてある、卽ち「無神主義の教育に代へるに、精神主義の教育を以てすれば可いのてある。」

新學と新教育の與黨ば曰ふてあらう、なんと云ふ愚かなことてあらう、そんなことを考へる馬鹿物、イヤサ時勢後れの頑冥者は一體誰てある！、そんなことを敢て書物に書かうとする剛情者は一體誰てある！二十世紀の今日に當り、文明と進歩した科學（卽ち物理學や、化學や、機械學等）の光りが赫々と輝いてゐる時世に於て、一體誰が斯う云ふやうな文明進歩に反對して、わざ〳〵五十年も退歩し、開け切つてゐる今日のやうな學校に、吾々の先祖の單純な教育を復興せしめやうなどとする者があらうか、成程吾々の祖先は『凡ての人々の主が天にゐる』と云ふやうなことを正直に信じて、それを兒孫に教へてゐたのてある云々と。

然しさう云ふ言葉に答へるのは何も六箇敷いことはない、物理學がいくら進歩したからとて、宇宙の主宰を變じた譯てはない。世界の秩序の爲に千年前の昔に必要てあつた法則は、今でも矢張必要てある。そして吾々の祖先に眞理てあつた所のものは、其の子孫なる吾々にも依然眞理てある。處て、吾々の祖先は教育の土臺として何を据ゑたてあらうか？彼

等は今日の革命論者の如く、『世には物質の外、何にもない、隨て人は何にも希望する所もなく、恐怖する所もなくして、全然自由である、強くて巧猾てありさへすれば、爲たい放題なことを爲てもかまはない』などと云ふことを教へなかつた。彼等ば子供にも、孫にも恁う云ふことを教へて居つた、『神を畏敬して、其掟を守りなさい、それが人の人たるべき道てある』と。

若し人が本統に自分の心の奥底を探らうと思ふならば、常識によつて必ず吾々の祖先のやうに、實際人となるには、爲(これ)より賢明な教はないと言ふてあらう。それに古來の經驗も亦左の如く證明してゐる、いくら隆盛な國民でも、安寧秩序を維持するには、神を畏敬して其掟を守るより外に道はないと。

これは明かてある、何にも解り難いことてはないが、然し現代の人々は之を理解するてあらうかと云ふに、理解しさうには思はれない、少くも大多數に取つては然うてある。先づ彼等は自分等の受けた教育又自分等が人に授ける教育の不吉な結果を自分等の目て見なければ承知が出來ないのてある。後になつてから初めて何處かち吹いて來たかを考へて解るやうになるのてある、

然し革命は最早地平線上の嵐の如く恐ろしい勢て遣つて來るのが目にも見え、耳にも聞える。思慮のある賢明な人々(先見の明ある人々)はそれを喰止めたいと思つてゐる、少くも萬事を顚覆するのを阻止したいと思つてゐる。けれども革命來を妨げることは、今日ては餘程六箇敷い、今てはもう遲過ぎる。颶風が既に吹いて來て途中に荒んてゐるときには、それを止めることは困難てある、まだ遠くにゐる時分に、それに捲込まれないやうに用心をするのが通常(つね)てある。現在に於て出來ることはそれ位のことてある。

それから嵐が既に吹き去つて、舊社會が革命のプログラムによつて破壞されて了つてから生き殘つてゐた人々が殘趾の復興と新社會の建設とに取掛り、苦(にが)い經驗に教へられて、將來の社會を堅固に立てやうとするてあらうが、その時には、無神主義の學問の土臺とは

遣つた土臺を求めるてあらう。

（三十六）

こんな事を今日の人々に言つたとて、殆ど無駄てあらう。今人の多くはこんな事を信じまい、設令以上に述べたことが眞理てあると理解しても、實際には顧慮しないてあらう、輕蔑して肩を聳かし、左の如く冷笑するばかりてあらう、『そんな理窟は、五十年前ならばよかつたかも知れぬが、爾來世は進歩した、吾々を天保時代の人と思ふのは大間違てある、そんな議論をするのは、餘り時世遲れてある』

如何にも時世遲れてある。前に記したやうな大きな謬想が一國の人間社會一般に擴まるやうになれば、最早矯正が出來ない、否切言すれば、謬想それ自らてなければ矯正は出來ない、卽ち先づ第一その謬想をしてその生ぜしめ得べき凡ての結論を生じなければならない、次に人々が自分の眼てその謬想から生じた凡ての禍害を見たとき初めて目がさめて、自分が間違つたとさとるてあらう、否、人に欺されたと氣がつくてあらう、何ぜなれば此の二つの事は、たび〳〵どつちも事實てあるからてある。

處て、教育に於ける無神主義もその通りてある。近き將來の人々が、同主義から生じて來る禍害を見て、成程禍因は同主義に在つたなと曉やうになるてあらう、そして父祖がまだ豫防策を講ずることが出來た時に、それを講じなかつたのを追想して、どれほど遺憾に思ふか知れぬてあらう。

世界的革命

畢

大正九年五月廿一日印刷
大正九年五月廿五日發行

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區猿樂町一丁目二番地　佛蘭西藝文社
佛蘭西藝文社代表者　東京市神田區猿樂町一丁目二番地　前田利繼
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十九番地　丹羽誠次郎
印刷所　東京市神田區錦町三丁目十九番地　忠義堂印刷所
發行所　東京市神田區猿樂町一丁目二番地　佛蘭西藝文社
販賣所　三才社　東京堂　勉強堂

定價六十錢

佛蘭西藝文社既刊書目

佛國文豪ガブリエル・ダザンブジヤ著

幸福の新理想

定價金貳拾五錢　郵稅金貳錢

曠世の英雄ナポレオン述

ナポレオン戰爭演說

定價金拾錢　郵稅金貳錢

佛國文學博士ヂ・ベルトラン原著　野薔薇譯述

奇蹟實話ルルドの靈窟

定價金四拾五錢　郵稅金四錢

佛蘭西藝文社編

平和の哲學

定價金拾八錢　郵稅金貳錢

同上

佛文平和の哲學

定價金貳拾錢　郵稅金貳錢

同上

デモクラシーと國家の將來

定價金參拾五錢　郵稅金貳錢

發行所　佛蘭西藝文社
東京市神田區猿樂町一丁目二番地

LA REVOLUTION MONDIALE

PAR

TOKYO—FRANCE—GEIBUNSHA

Représentant: C. MAEDA Professeur

1919

PRÉFACE.

D'ordinaire, quand on parle de révolution on entend par ce mot un changement plus ou moins considérable dans le gouvernement, dans la constitution, dans l'état social d'un peuple. Par exemple, la révolution japonaise, arrivée au commencent du règne de Meiji, fut un de ces changements. Quoique très importante elle ne fut cependant qu'une révolution particulière, en un seul pays.

Quand on dit la Révolution mondiale, cela signifie un changement beaucoup étendu et plus profond ; un bouleversement complet dans les idées, les mœurs, les lois, les institutions des différents peuples, dans le monde entier. C'est pourquoi on l'appelle aussi la révolution universelle.

Cette révolution non seulement est un phénomène, un événement unique dans l'histoire de l'humanité, mais, c'est d'elle, par dessus tout, que dépend aujourd'hui l'avenir du monde. Pour cette double raison il n'y a peut-être pas de question qui mérite autant que celle-là d'être étudiée.

En apprenant, par la voix des journaux, les désastres causés par la révolution, les excès monstrueux commis par les révolutionnaires, spécialement par les Bolcheviks en Russie, il n'y a personne qui ne s'indigne contre de pareilles horreurs, et qui ne craigne, pour son pays, que jamais semblable fléau ne vienne à s'y répandre.

Cependant beaucoup de ceux qui condamnent ainsi les effets de la révolution, admettent eux-mêmes et souvent propagent autour d'eux les

idées révolutionnaires, c'est-à-dire les principes mêmes desquels est née la révolution. Seulement comme les conséquences mauvaises de ces principes ne suivent pas aussitôt, beaucoup ne se doutent même pas combien ces idées sont nuisibles et dangereuses.

Partout où elles sont répandues, elles sont un danger pour la société. Elles ressemblent à l'eau qui pénètre et ronge peu à peu les fondements d'un édifice. La maison ne s'écroule pas en un jour ; mais l'eau travaille sans cesse ; et si l'on n'y veille pas, au moment où les hommes y pensent le moins, la maison s'écroule, et dans sa chute, elle écrase tous ceux qui se croyaient en sûreté sous son toit. Ainsi en est-il de toute société rongée par les idées révolutionnaires.

Pour éviter le péril, et peut-être un jour, le malheur d'une pareille catastrophe, m'adressant, dans ce petit livre, aux hommes intelligents et vraiment amis de leurs pays, brièvement mais clairement, je voudrais dire : En quoi consiste au juste la Révolution dont tout le monde parle.— Quelles sont les causes qui produisent scientifiquement la Révolution. — Pour éviter la Révolution et ses suites que faudrait-il faire ?

Lorsque le mal sera venu il sera trop tard de penser au remède, il est plus prudent et plus sage de s'en préoccuper auparavant.

LA REVOLUTION MONDIALE.

I

Il y a environ quinze ans, une brochure a paru, qui avait pour titre les préparatifs de la Révolution. A l'époque de son apparition, cette brochure fut peu remarquée, et ceux qui en prirent connaissance la trouvèrent presque tous exagérée, fausse, violente. " odayaka de nai ", tel fut le jugement généralement porté sur cet opuscule.

En effet il devait en être ainsi. Car à cette époque, c'est-à-dire il y a quinze ans, la paix règnait à peu près dans le monde entier. Çà et là, il est vrai, dans plusieurs contrées, des disputes politiques plus ou moins vives agitaient bien l'opinion publique, mais non pas au point de compromettre l'ordre et la sécurité des peuples.

C'est pourquoi, à considérer d'une part la tranquillité générale du monde, et de l'autre les désordres et les excès prédits et décrits d'avance dans la brochure dont nous parlons, il n'est pas surprenant que cette brochure ait été jugée comme elle l'a été, c'est-à-dire exagérée, fausse et violente.

II

Mais pendant ces quinze ans, bien des choses ont changé dans le monde. A cette époque beaucoup d'hommes intelligents pensaient que

désormais la guerre était devenue impossible. Les peuples étaient trop civilisés, les nations étaient trop éclairées pour qu'on revit encore sur la terre cette barbarie de peuples entiers se tuant les uns les autres, parce qu'ils n'ont pas assez d'intelligence pour s'expliquer et s'entendre entre eux.

Or on sait ce qui est arrivé. La guerre est revenue, et non pas une guerre ordinaire, comme celles qu'on avait vues dans les temps anciens, mais une guerre comme on n'en avait jamais vue sur la terre, une guerre savante, exécutée avec une barbarie sans exemple, même parmi les peuples les plus barbares.

Et non seulement la guerre, mais la révolution aussi est venue, pendant que les peuples entre eux s'acharnaient à se tuer, à se détruire les uns les autres. Dans presque tous les pays du monde, depuis quatre ans, la révolution a détruit les vieilles institutions des peuples, brisé les trônes, renversé les rois, changé la constitution des états, "tout détruire, pour tout renouveler", voilà, en deux mots, tout son programme.

Ainsi donc, après la guerre, la révolution; et, dans plusieurs contrées du monde, par exemple en Russie et en Allemagne, la guerre et la révolution en même temps.

III

C'est de la Révolution que nous allons parler ici.

Afin de rendre plus compréhensible ce que nous avons à dire sur ce sujet, peut-être ne sera-t-il pas inutile de préciser au juste ce que l'on entend par ce mot Révolution.

Dans le langage des révolutionnaires, deux noms sont répétés sans cesse, et reviennent continuellement dans leurs discours, ce sont les deux noms tyrannie et liberté. Or c'est par l'intelligence de ces deux noms que l'on comprend le mieux en quoi consiste la Révolution.

En effet, toujours d'après les révolutionnaires, qu'est-ce que la tyrannie? On appelle tyrannie tout ce qui gêne, diminue, entrave, enchaine, la liberté de l'homme. Et la liberté quelle est-elle? La liberté est, pour chaque homme, le droit absolu de faire ce qu'il veut; et personne n'a contre lui, le droit de l'empêcher de faire ce qu'il désire, ni de le contraindre à ce qu'il ne veut pas. Par conséquent, briser toute tyrannie, supprimer tout obstacle, revendiquer pour soi la plénitude de la liberté, voilà l'objet de la révolution, et le but des révolutionnaires.

Ici tout d'abord un homme, honnête et de bon sens, s'indigne et se récrie: "Mais c'est absurde." Cher lecteur, je vous en prie, ne vous indignez pas, et prenez un peu patience. Nous ne raisonnons pas encore; pour le moment il s'agit seulement d'expliquer au juste ce que c'est que la Révolution. Le raisonnement viendra plus tard.

IV

Commençons par examiner premièrement quelles sont les Tyrannies auxquelles les révolutionnaires prétendent, disent-ils, soustraire enfin le genre humain. Elles sont nombreuses, ou plutôt, toujours selon les révolutionnaires, dans la société, telle qu'elle a été jusqu'à maintenant, il n'y a que tyrannie partout. Les énumérer toutes ici serait trop long, et d'ailleurs ce n'est pas nécessaire. Cependant pour donner une idée exacte de ce qu'on appelle "l'œuvre de la révolution", il importe d'exposer brièvement au moins les principales de ces tyrannies sociales.

Et afin qu'il ne reste dans l'esprit du lecteur ni obscurité ni confusion, procédons avec ordre et parlons clairement.

V

Prenons d'abord l'homme dès son premier âge, et considérons-le dans la famille, dans la maison même de ses parents. Comment est-ce qu'il grandit et qu'il est formé, en quoi consiste ce qu'on appelle l'éducation domestique? A peine l'enfant est-il capable de répéter ce qu'il entend, et d'imiter ce qu'il voit, même sans le comprendre, que tous les jours, du matin au soir, et combien de fois chaque jour, il entend sa mère ou toute autre personne, lui dire et lui répéter à tout propos, ne fais pas cela, parce que ce n'est pas bien; ne dis pas cela, parce que ce n'est pas beau. Voilà comme il faut dire, voilà comme il

faut faire. Et si l'enfant obéit, il est loué, récompensé, au contraire s'il n'obéit pas, il est blâmé, puni.

Et ainsi, dès le premier âge, se forme dans l'esprit de l'enfant, par conséquent dans l'esprit de l'homme, un préjugé, le plus tyrannique de tous, savoir, qu'entre les différentes actions hunaines, il y a une distinction à faire; les unes sont louables, les autres blâmables, les unes sont bonnes, les autres mauvaises; donc, entre le bien et le mal il y a une différence réelle, radicale. D'où il suit que les hommes eux-mêmes, d'après leurs œuvres bonnes ou mauvaises, sont naturellement partagés en deux catégories, les bons et les méchants.

Conformément à ce préjugé, dans la société telle qu'elle est maintenant, entre le bien et le mal il semble qu'il existe un abîme, large et profond comme l'océan. Pour régler la conduite et les actions des hommes, jusque dans les détails même les plus intimes, il y a des règles et des lois de toute sorte. Ces règles et ces lois réunies forment ce qu'on a appelé "la morale humaine"; ensemble, elles forment un code compliqué et considérable. C'est une véritable science que non seulement il faut apprendre, mais, ce qui est beaucoup plus difficile, c'est qu'il faut la mettre en pratique.

VI

De toutes les tyrannies sociales, la plus dure et la plus difficile à supporter est précisément

cette loi morale. Comment cela? C'est qu'elle s'étend à tout, elle s'applique à toutes les actions des hommes, même les plus cachées; donc c'est partout et à tout moment qu'elle gêne, qu'elle entrave la liberté. D'autre part, telle est la force du "préjugé" que si un homme n'observe pas cette loi morale, aux yeux des autres hommes il apparaît comme marqué d'une tache honteuse; et dans la société, fût-il au rang le plus honorable, il est déchu, ayant perdu du même coup l'honneur, et la confiance des autres hommes.

C'est pourquoi, dans leur entreprise de tout détruire pour tout renouveler, la première tyrannie que les révolutionnaires entendent supprimer, c'est précisément cette loi morale; parce que, aussi longtemps que cette loi existera, et que les hommes se croiront obligés de l'observer, il leur sera toujours impossible de jouir pleinement de leur liberté.

VII

Mais, s'il en est ainsi, dans la nouvelle société transformée, quelle sera la règle des actions humaines? car enfin pour agir il faut bien une règle quand même. Rien de plus aisé à comprendre, ni de plus facile à observer que la morale de la révolution. Désormais, dans la société nouvelle, une action est bonne quand elle est utile ou agréable, elle est mauvaise quand elle est nuisible ou déplaisante. Une action est juste quand elle réussit, quand elle

atteint le but proposé. Si elle échoue, elle sera blâmée, peut-être méprisée, il fallait réussir ou ne pas commencer.

De justice ou d'injustice il n'est pas même question, on n'en parle pas. Tout dépend uniquement du succès. Juste ou injuste, si vous réussissez tout le monde vous approuvera. Dans la nouvelle société, celui-là sera le plus honoré qui aura été le plus habile; et celui-là sera jugé le meilleur des hommes qui sera le plus rusé et le plus fort.

De là il suit que ce qu'il faut enseigner dorénavant aux enfants et aux jeunes gens, dès le premier âge, ce n'est plus comme autrefois à éviter le mal et faire le bien, à estimer et placer au-dessus de tous les avantages, l'honneur d'être un homme probe et vertueux; mais uniquement à bien comprendre leurs propres intérêts, et à réussir dans leurs entreprises.

Ainsi la Révolution fait disparaître cette première entrave à la liberté, savoir, la loi morale; la diffférence entre le mal et le bien; erreur aussi ancienne que le monde lui-même; triste effet du préjugé et de l'ignorance des hommes d'autrefois. Telle est ce que nous avons appelé la première tyrannie sociale. Celle-là supprimée, une large porte est ouverte à la liberté.

VIII

La seconde de ces tyrannies est l'autorité. Voici exactement en quoi elle consiste. Dans la société d'à présent, telle qu'elle est constituée,

un homme ne peut pour ainsi dire pas se mouvoir et faire un pas, sans rencontrer une autorité, et se heurter contre elle. Ainsi dans la famille d'abord, c'est l'autorité du père et de la mère. L'enfant ne fait rien sans leur consentement, et, ce que le père ou la mère lui commandent, qu'il le veuille ou non, il est obligé, forcé même, de l'exécuter. A l'école, c'est l'autorité du maître. A l'atelier, c'est l'autorité du patron. Dans la rue, c'est l'autorité de la police.

Dans la société tout entière, d'une extrémité du pays à l'autre, toutes les relations des citoyens entre eux, et pour ainsi dire tous leurs mouvements, sont réglés par l'autorité du législateur, par l'autorité des juges, par l'autorité du geôlier de la prison, et, dans les cas extrêmes, par l'autorité du bourreau. En un mot, l'autorité est partout.

Hâtons-nous de dire que le peuple bon et honnête n'a jamais eu l'idée de s'en plaindre. Au contraire il trouve tout naturel d'observer fidèlement les lois justes, et à l'égard de ceux qui ont autorité sur lui, toujours plein de respect, il obéit avec soumission et amour. Ainsi du moins faisaient les anciens hommes.

IX

Mais au jugement des révolutionnaires, il n'en est pas ainsi. A leur sens, l'autorité, étendue de la sorte sur tout un grand pays, que dis-je, sur le monde entier, ressemble à un vaste réseau de fer. Dans ce réseau, tous les

peuples sont enfermés, serrés, opprimés, ils y étouffent. Il n'est que temps de briser ces fers, et de rendre à toutes les nations leur liberté.

L'autorité n'est qu'un vain mot, elle n'existe pas. Celle qui pèse depuis si longtemps sur le monde est une usurpation d'hommes ambitieux. Ces hommes, parce qu'ils étaient les plus forts, ont voulu dominer sur les autres hommes, puis quand ils ont été les maîtres, ils ont prétendu que, pour eux, c'était un droit de dominer les autres.

Par nature tous les hommes sont égaux, et aucun homme n'a par lui-même le droit de dominer sur les autres. Comme homme, chacun est également libre, indépendant, et n'a personne au-dessus de soi. Si dans la société, quelques-uns ont la charge de gouverner les autres, ce n'est pas parce qu'ils sont supérieurs aux autres, c'est parce que la société les a choisis et délégués pour remplir cette charge. L'unique souverain du pays c'est le peuple lui-même; et la seule autorité, s'il y en a une, c'est la volonté de la nation.

X

Au sens des révolutionnaires, ceux que l'on appelle les fonctionnaires ne sont pas les " chefs " du peuple, ce sont les " mandataires " du peuple; ses serviteurs et non pas ses maîtres. Quand ils portent des lois, ou promulguent des décrets, ce n'est pas leur propre volonté qu'ils imposent: en qualité de mandataires ils ne font

qu'obéir, et, quand ils paraissent commander, ils ne font autre chose qu'exécuter les volontés de la nation.

D'après la même théorie révolutionnaire, désormais, à l'atelier, ce n'est plus le patron qui commandera, ce sont les ouvriers. A l'école, ce ne sera plus le professeur, ce seront les écoliers. Enfin dans la famille, ce sont les enfants qui seront les maîtres, les parents n'auront plus qu'à obéir.

Ajoutons tout de suite que, pour le bon ordre et la paix du monde, il faut espérer que cette œuvre de la révolution ne s'accomplira pas tout entière. Car si toute la terre était ainsi bouleversée, par la révolution, les hommes seraient forcés de chercher une autre planète pour y demeurer, parce que la terre serait devenue inhabitable.

XI

En effet, qu'arrive-t-il dans un pays, lorsque les révolutionnaires ont fini par y être les maîtres ? On ne le sait que trop aujourd'hui par l'histoire, et par le spectacle de ce qui se passe maintenant dans une grande partie du monde.

Au nom de la liberté, et sous prétexte de supprimer la tyrannie, ils (les révolutionnaires) commencent par renverser ou détruire tout ce qui, dans la société, représente ou rappelle l'autorité. Depuis le premier degré jusqu'au dernier de la hiérarchie sociale, c'est-à-dire, depuis le Souverain de la nation, jusqu'au plus

humble employé de la police, tous ceux qui détiennent une part quelconque de l'autorité, il faut qu'ils disparaissent ; au dire des révolutionnaires, ce sont tous des tyrans. Et ce ne sont point là de vaines menaces. Par le feu, par le fer, par le poison, on ne sait que trop aujourd'hui comment ils exécutent leurs desseins, et arrivent fatalement à leurs fins.

Et quand les hommes de la révolution ont triomphé, quand tous les représentants de l'autorité ont été supprimés ; et que les révolutionnaires vainqueurs, restent seuls, et maîtres du champ de bataille, alors que font-ils ? Chose étrange, ils ne trouvent plus que l'autorité est une tyrannie. Au contraire, ils se proclament eux-mêmes les seuls maîtres du pays, les seuls chefs de la nation ; et malheur à qui essaye de leur résister ; pour celui-là c'est la mort. A leurs yeux, le plus grave, le pire de tous les crimes, c'est de tenter, de méditer même, une contre-révolution. C'est-à-dire, de faire ce qu'ils ont fait eux-mêmes.

XII

Mais que devient alors la liberté. Agir ainsi n'est-ce pas au contraire la plus insupportable tyrannie ? Oui, en effet, mais tout en étant, à l'égard des autres citoyens du même pays, les plus durs, souvent les plus cruels tyrans, les révolutionnaires vainqueurs ne cessent pas pour cela de parler de la liberté. Au contraire, ils l'invoquent, ils la proclament plus fort que jamais ;

mais personne ne s'y trompe. C'est pour eux seulement qu'ils réclament la liberté, la liberté complète, absolue, de tout faire, mais ce n'est pas pour la donner aux autres. Aux autres, ils ne reconnaissent qu'une seule liberté, savoir, la liberté d'obéir..... ou de mourir.

Mais, direz-vous, obéir à qui? Aux nouveaux maîtres de la nation, c'est-à-dire à eux, les révolutionnaires. Et pourquoi les autres citoyens leurs obéiront-ils, car enfin eux aussi sont des hommes, eux aussi ont également droit à la liberté. Les autres obéissent tant qu'ils craignent de mourir, ou qu'ils ne se croient pas les plus forts. Mais bientôt, ils se comptent entre eux, ils s'unissent, contre la première révolution, une autre révolution s'organise, et la guerre commence entre citoyens. Par tout le pays la paix et la sécurité cessent, le peuple inquiet, malheureux, ruiné, ne fait plus que gémir, et dans sa détresse extrême, il demande à grands cris qu'il vienne enfin un homme, "un homme" juste et bon, qui, ayant autorité, prenne en main le gouvernement du pays, et rétablisse partout l'ordre et la paix.

Il est bien vrai que l'autorité, lorsqu'on en abuse, engendre quelquefois la tyrannie, mais de toutes les tyrannies, la pire et la plus redoutable n'est pas l'autorité, c'est l'anarchie, précisément lorsque dans une société il n'y a plus d'autorité.

XIII

La troisième tyrannie sociale est le Droit de Propriété. En quel sens le droit de propriété est-il une tyrannie? Il entrave la liberté des citoyens. Rien de plus facile à comprendre. Voyez, par exemple une ville..... Dans cette ville, chaque maison a un maître, et dans cette maison chaque objet appartient à son propriétaire. Voyez un village, une campagne, un pays entier, il n'y a pas un champ, pas une rizière, pas un jardin, pas un arbre, qui ne soit la propriété, "la chose" d'un maître.

Or ce qui m'appartient est à moi; moi seul ai le pouvoir de m'en servir, de le vendre, de le donner, si cela me plaît; mais personne autre que moi, n'a ce pouvoir. Ma chose est à moi, je la garde, et, contre ceux qui voudraient me la prendre, je la défends.

Et ceux qui ne possèdent rien, comment feront-ils? Exclus partout de la maison, du jardin, du champ d'autrui, par le droit de propriété, il leur reste la liberté de circuler, s'ils veulent, par les grands chemins, de regarder le jour, et de respirer à leur gré l'air du ciel. C'est quelque chose assurément, mais, pour vivre ce n'est pas assez; de plus il faut au moins un toit, la nourriture et le vêtement; comment se les procureront-ils, s'ils ne possèdent rien? Ils travailleront, c'est-à-dire que, prêtant à quelque propriétaire le concours de leur intelligence et de leurs bras, ils recevront de lui, en échange, un salaire

convenable ; et c'est de ce salaire justement obtenu, qu'ils vivront.

Telle a été jusqu'à maintenant la condition sociale des propriétaires et des travailleurs ; condition si naturelle que, jusqu'à ces derniers temps, personne n'avait songé même à s'en plaindre. Au contraire, les vieillards se rappellent encore, comment dans l'ancienne société, maître et serviteurs vivaient en paix, souvent leur vie entière, contents comme s'ils avaient formé ensemble une même famille.

XIV

Mais depuis cinquante ans l'état du monde a beaucoup changé. Non seulement maîtres et serviteurs, ne forment plus une famille, mais, excepté dans la vie domestique, ces noms maîtres et serviteurs ne sont même pas employés. Ailleurs, dans la vie commerciale et industrielle, on dit les patrons et les ouvriers, ou bien encore les capitalistes et les travailleurs, plus brièvement, le capital et le travail.

Dans la société contemporaine, les patrons et les ouvriers travaillent ensemble, mais presque nulle part ils ne sont unis. Ils forment dans la société deux catégories, deux classes d'hommes, non seulement distinctes, mais rivales, opposées l'une à l'autre, et facilement ennemies. De part et d'autre, patrons et ouvriers cherchent naturellement leurs intérêts. Or comme ces intérêts sont opposés et tous prétendant aux plus

grands avantages possibles, il résulte de là que, entre patrons et ouvriers, l'état habituel est ce qu'on pourrait appeler l'état de guerre. Guerre plus ou moins violente, non pas toujours à main armée, mais guerre quand même presque continuelle.

Tel est, on ne peut le nier, l'état de la société contemporaine ; des grèves, des révoltes, des exigences exagérées, de la part des uns, des accaparements injustes, des abus de pouvoir de la part des autres, voilà ce que l'on entend tous les jours.

XV

En face du malaise général de la société contemporaine, que prétendent les révolutionnaires ? Pour remédier à ce mal social, mal grave assurément, ils proposent de recourir à un remède décisif, radical même. Et quel est ce remède ? Puisque c'est la propriété qui est la cause de tous les maux, ils veulent supprimer la propriété. Comment cela ? D'après eux, aucun particulier désormais n'aura plus le droit de s'approprier quoi que ce soit, ni de le posséder comme sa chose.

Dans chaque pays c'est au peuple, (à la nation), que la terre appartient, par conséquent c'est à la nation que doivent appartenir toutes choses. Les champs propres à la culture sont à la nation. Les forêts, les mines, toutes les richesses de la terre sont à la nation. Tout ce qui est construit à la surface de la terre, tout ce qui vogue à la

surface des mers, les édifices publics, les maisons particulières, les usines, les magasins, les chemins de fer, les vaisseaux, les télégraphes, tout enfin est à la nation. Ce que les particuliers ont possédé jusqu'à maintenant, c'est le droit de la nation de le revendiquer et de le reprendre.

Ensuite, entre les millions de citoyens qui composent la nation, l'usage de tous ces biens sera réparti de telle sorte que chacun en aura sa part, et personne ne sera plus riche, personne ne sera plus pauvre que les autres, puisque, le droit de propriété étant supprimé il n'y aura plus ni riche ni pauvre, mais tous seront égaux.

XVI

Dépouiller les particuliers propriétaires de ce qu'ils possèdent, les chasser de leurs maisons, leur enlever leurs meubles, leur argent, déclarer que la propriété particulière est abolie, que l'unique propriétaire est la nation, cela, les révolutionnaires pourront le faire un jour; il suffit qu'ils aient, de leur côté le nombre et la force; le nombre, c'est-à-dire qu'ils aient la majorité parmi les représentants du peuple, et que par une loi ils déclarent que désormais le droit de propriété est aboli; et que tous les biens, meubles et immeubles, font retour à la nation; la force, c'est-à-dire, qu'il y ait en même temps une armée qui se charge de faire exécuter cette loi. Alors, du moins pour un temps, la propriété sera supprimée; dans tout le pays, personne ne sera

plus maître de rien, et, sans rien posséder, chacun aura également droit à tout. Jusque là, il n'y a rien d'impossible, rien même de bien malaisé; car tant qu'il s'agit seulement de détruire et de renverser ce qui existe, le succès n'est pas difficile; pour y réussir sûrement, du courage et de l'audace suffisent. Mais ce qui est bien plus malaisé c'est d'organiser, c'est de gouverner une société dans laquelle il n'y a pas de maître, et pourtant tout le monde est maître, où personne n'a de droit sur la propriété commune, puisqu'elle est à la nation, et pourtant chacun a des droits égaux à ceux de tous les autres, puisque chacun fait partie de la nation.

XVII

Quelle constitution les révolutionnaires donneront-ils à cette "société de l'avenir"? Les problèmes à résoudre sont si difficiles et si nombreux, que jusqu'à maintenant on ne connait pas encore de solution vraiment satisfaisante. Pour savoir ce que feront plus tard les révolutionnaires, et s'ils réussiront, dans leur dessein, il faut d'abord attendre; plus tard on verra.

Jusqu'à maintenant ce qu'on a vu est fort simple et très naturel. Tant qu'il s'agit seulement de dépouiller les autres et de prendre ce qui leur appartient, les révolutionnaires veulent tous supprimer le droit de propriété, jusque-là ils s'entendent parfaitement; mais quand ils sont devenus eux-mêmes propriétaires, et que

quelque chose leur appartient en propre, alors ils changent d'opinion, au moins en pratique, c'est-à-dire que ce qu'ils ont, ils le défendent, et même très âprement; de telle sorte que presque partout les nouveaux propriétaires, ceux qui n'avaient rien auparavant, sont plus attachés que les autres à ce qu'ils possèdent, et, à l'égard des autres hommes, plus durs que les anciens propriétaires.

Il est bien vrai que le droit de propriété, lorsque les propriétaires en abusent, peut engendrer et engendre en effet quelquefois une dureté qui ressemble à de la tyrannie; mais, en supprimant le droit de propriété, on causerait à la société un dommage bien autrement grave, puisque ce serait y occasionner, encore une fois, l'anarchie complète, et par conséquent la ruine même de la société.

XVIII

D'après le plan de la révolution, pour renouveler la société, la quatrième tyrannie à supprimer est " la Famille ". La famille, une tyrannie sociale, voilà un mot qui, probablement, n'a encore jamais été prononcé.

Que la famille, telle qu'elle existe depuis l'origine du monde, impose à l'homme des devoirs, tout le monde le sait; mais que ces devoirs soient pour l'homme une tyrannie, et fassent de lui un esclave, si quelqu'un a pu le penser, certainement qu'il n'a jamais osé le dire; parce que, dans une famille, " devoir et bonheur " non

seulement ne sont pas opposés l'un à l'autre, mais tout au contraire, on ne trouverait pas une famille, même une seule, dans laquelle le bonheur règne, sans que le devoir familial y soit observé. Comme aussi on n'en trouverait pas une seule où le devoir soit accompli, sans que cette famille soit heureuse. Pour en avoir la preuve, interrogez sur ce point important, ceux qui en ont fait l'expérience, et qu'ils disent si jamais, dans leur vie de famille, le fidèle accomplissement de leurs devoirs les a empêchés d'être heureux.

Il existe sur ce sujet, en japonais, un livre intéressant qui a pour titre " Katei no Okoku " le Royaume de la famille. Il était impossible de mieux dire. En effet, une famille régulièrement constituée est un petit royaume, comme le royaume est une famille agrandie. Comme le royaume, la famille aussi a son roi, elle a sa reine, elle a son peuple, elle a ses lois et son gouvernement. Tout le monde y travaille ensemble, chacun à sa manière, on y souffre aussi quelquefois, mais, pourvu que l'ordre et la paix y règnent on y est heureux.

XIX

Comme dans le plan de la révolution il ne doit plus y avoir ni roi ni royaume, la famille non plus ne doit plus exister, et cela pour quelle raison? Parce que la famille, telle qu'elle a existé jusqu'à maintenant, ayant sa constitution

propre, ses lois, son chef et son gouvernement, est aussi une entrave à la liberté, " une tyrannie sociale ", et pour cette raison elle doit disparaître.

En quoi la famille est-elle une entrave à la liberté. Pour l'expliquer plus clairement, il est nécessaire d'entrer ici dans quelques détails. Nous tâcherons de le faire avec discrétion et prudence, car il s'agit cette fois de choses délicates et difficiles à dire.

D'abord, avant d'avoir formé ensemble une famille, un jeune homme et une jeune fille ne peuvent pas suivre leur inclination ; jusqu'à ce que le mariage soit contracté ils sont obligés d'attendre ; ou, s'ils usent auparavant de leur liberté, ils s'exposent à perdre leur réputation et leur honneur, à compromettre même le bonheur de leur vie entière. Puis quand ils sont unis par le mariage, désormais ils sont liés complètement et exclusivement l'un à l'autre, et jusqu'à la mort, dans la bonne et la mauvaise fortune, dans la santé ou la maladie, ils se doivent l'un à l'autre une fidélité inviolable.

Il est vrai que dans certaines conditions, la loi civile permet la séparation, le divorce, mais même après que le juge leur a permis de vivre loin l'un de l'autre, il leur reste quand même une tache qui ne s'efface jamais tout à fait, et un regret qui presque toujours dure aussi longtemps que la vie.

Ensuite, pour élever leurs enfants, leur préparer une carrière et leur assurer un avenir convenable, combien de souffrances, de travail, de soucis de toutes sortes les parents ne sont-ils pas obligés de supporter ? Ou plutôt ils ne sont jamais sans inquiétude, et leur peine ne finit qu'avec leur vie.

XX

De leur côté, dans la famille, les enfants sont-ils moins liés que les parents ? Chaque maison a sa discipline particulière que les enfants, sont obligés de subir. Les parents ont leurs droits, leurs caprices, que les enfants doivent supporter. Car s'il est vrai que les enfants ont leur humeur, les parents aussi ont la leur. A leur père et à leur mère ils doivent respect, obéissance, et assistance pendant leur vie entière.

La famille assurément a des avantages et des agréments, on ne peut le nier, mais ces agréments et ces avantages n'est-ce pas les payer trop cher que de les acheter au prix de la liberté ? Car ne l'oublions pas, ce sont les révolutionnaires qui parlent ; or, pour les révolutionnaires, tous les biens même les plus précieux, sans la liberté absolue, ne sont rien.

XXI

Mais si la famille, telle qu'elle a toujours existé, est supprimée, qu'est-ce que les révolutionnaires se proposent de mettre à la place ? Sur ce point, le plan de la révolution est tellement déraisonnable, monstrueux même, qu'il

vaudrait certainement mieux n'en pas parler. Cependant, comme ce plan est exécuté aujourd' hui même intégralement dans plusieurs pays, il faut le rapporter quand même, afin de montrer jusqu'à quels excès les hommes sont capables de se porter, ou plutôt, jusqu'à quelles extrémités peuvent les conduire des principes faux, quand ils en ont dans l'esprit.

En somme, un mot résume tout entier ce plan de la révolution, savoir, entre l'homme et la femme l'union est libre. A tout âge, en tout lieu, en toute condition, rien ne doit s'opposer à leur liberté. Chez les derniers et les plus avancés parmi les révolutionnaires, les hommes et les femmes sont socialisés, c'est-à-dire qu'ils sont assimilés aux biens possédés en commun par les habitants d'une ville ou d'un village. Ces biens n'appartiennent à personne en propre, mais chacun s'en sert et en jouit comme bon lui semble.

Là où le mariage intervient, ce mariage n'est pas autre chose qu'un contrat ordinaire, librement conclu entre deux personnes, qui s'unissent en vue de leur intérêt ou de leur plaisir. Et comme elles se sont unies librement, elles se séparent aussi librement, quand elles ont cessé de se convenir.

Et si des enfants naissent de ces unions, les parents n'en ont pas le souci, la société les élève; ils sont la chose de la société, ils ne connaissent point leurs parents, et leurs parents

ne les connaisent pas; c'est-à-dire que dans cette société de l'avenir, si jamais elle existe, les hommes seront au-dessous des animaux, car, excepté l'autruche, qui abandonne ses œufs sur le sable, sans les couver, il n'y a pas d'animaux qui abandonnent leurs petits sans les élever, jusqu'à ce que les petits soient capables de se suffire eux-mêmes. Il faut avouer que pour un temps de civilisation avancée comme celui où nous vivons, ce serait une grande honte pour l'espèce humaine si elle allait tomber à un pareil degré de décadence.

XXII

Ce qui est difficile à comprendre, dans le plan de la révolution, c'est que les révolutionnaires veuillent supprimer l'idée, et même le nom de Patrie, arracher du cœur de l'homme cet attachement, cet amour particulier que chacun éprouve naturellement pour les lieux où il est né, où il a vécu, pour le pays auquel il a le bonheur d'appartenir. Car même pauvre, et moins célèbre que beaucoup d'autres, mon pays, pour moi est le premier de la terre; c'est lui que j'aime le plus et que j'aimerai toujours. D'où vient donc que parmi les hommes de la révolution, un parti, déjà trop nombreux, prétend éteindre dans le cœur de l'homme, dans le cœur des peuples en général, l'amour de leur pays natal. Pour répondre il faut d'abord remarquer que le mot Patrie signifie ordinaire-

ment deux choses, savoir, premièrement la maison paternelle, et le village, " furusato ", où elle est située. C'est ce qu'on nomme aussi " la petite patrie. " Ensuite, le pays même dont elle est une partie par exemple le Japon. C'est ce qu'on appelle " la grande patrie ".

Si on dit le village, la maison paternelle, ou simplement la maison, cela rappelle naturellement les vieux parents, les ancêtres, les gloires et les traditions de la famille, l'héritage de vertu et d'honneur légué par les aïeux à leurs descendants. Or pour les révolutionnaires dont nous parlons, ce souvenir, cette tradition, cet héritage, sont désagréables, même à penser. Pourquoi? Parce que l'héritier d'une famille vertueuse, pour n'avoir pas à rougir de lui-même, est obligé d'être vertueux et de ressembler à ses pères. "Noblesse oblige" disait-on dans la vieille société européenne.

Or cette obligation d'être vertueux, un révolutionnaire ne l'admet pas; elle est contraire à la complète liberté dont il veut jouir. Voilà pourquoi, afin d'être absolument libre, il supprime la patrie; la petite patrie d'abord. Ensuite, pour la grande patrie, parmi les citoyens loyaux et généreux, on n'en trouve pas un qui n'aime pas son pays; pas un seul qui ne se glorifie de la force, de la richesse, de la prospérité de sa patrie. Jusque-là tout le monde est d'accord, mais ce n'est pas tout.

Pour qu'un pays soit puissant et prospère, il

faut que le peuple qui l'habite, soit un peuple courageux et dévoué. Pour que le pays soit fort et glorieux, il faut que son peuple sache travailler souffrir, combattre, et, quand il faut, sacrifier pour son pays sa richesse, son sang, sa vie même. Mourir pour son pays, voilà surtout en quoi consiste le vrai patriotisme. Mais ici les révolutionnaires s'arrêtent. Et que font-ils? S'il s'agit de profiter pour eux-mêmes des avantages qu'ils trouvent à servir leur pays, en y occupant des places honorables et lucratives, cela, ils le veulent bien, et même, ces places, avec quelle avidité ils se les disputent.....

Mais s'il s'agit de sacrifier leur intérêt propre pour le bien de leur pays, de se dévouer, de souffrir, de mourir surtout, pour que leur patrie vive et soit florissante, alors, s'ils peuvent se cacher, fuire le danger, se mettre à l'abri, ils n'y manquent pas, ils disparaissent. Ou même, si en faisant alliance avec les ennemis de leur patrie, ils trouvent le moyen de gagner davantage, de s'enrichir avec l'argent des ennemis, ils n'hésitent pas à trahir leur pays, à livrer leurs concitoyens à la mort, leur patrie à la honte et à la ruine.

Même dans cette dernière guerre où le monde entier a pu admirer tant d'exemples de dévouement sublime, tant d'héroïsme envers la patrie, n'est-il pas vrai que dans le même pays, l'égoïsme, la lâcheté, la trahison même se sont rencontrés, et que dans l'histoire pourtant si glo-

rieuse de cette fameuse guerre, il y a des hommes dont les noms maudits passeront à la postérité marqués d'une honte éternelle.

XXIII

Résumons maintenant en peu de mots ce qui précède.

Ainsi donc le plan de la révolution est bien clair. Son but est de briser la société telle qu'elle a existé jusqu'à présent dans tous les pays, même sauvages, et de la remplacer par une autre société établie sur des bases toutes différentes.

Pour briser l'ancienne société il faut d'abord renverser les cinq colonnes sur lesquelles elle a toujours reposé, savoir, la moralité, l'autorité, la propriété, la famille et la patrie.

Seulement les hommes de la révolution ne disent pas "les colonnes de la société", ils disent, "les cinq superstitions ou préjugés qui ont asservi et abêti jusqu'à maintenant l'espèce humaine, et dont il faut absolument qu'elle soit affranchie. Ce sera l'œuvre de la Révolution.

XXIV

Lorsque l'on entend exposer ce plan de la révolution, il paraît tellement exagéré, tellement absurde, que tout d'abord il semble impossible même d'y croire. Dans le temps de civilisation et de lumière où nous vivons, les hommes, sont-ils donc devenus tellement barbares, tellement dénués même de sens commun, qu'ils aient pu

imaginer pareilles folies! Mais si on considère ce qui arrive maintenant dans le monde, c'est-à-dire, lorsque nous voyons dans plusieurs pays de l'Europe et de l'Asie ce plan de la révolution mis à exécution, alors on est bien forcé de croire qu'il existe.

Selon les différents pays, la mise à exécution de ce plan n'est pas encore également avancée; ainsi elle l'est plus en Russie, elle l'est moins en Allemagne et en Portugal, néanmoins, d'une manière générale, on peut dire que le même mouvement révolutionnaire emporte maintenant tous les peuples; par la raison toute naturelle que, les mêmes idées étant répandues à peu près partout, produisent partout les mêmes effets. Car sur la terre il y a beaucoup de races d'hommes différentes, il y en a des blancs, des jaunes, des noirs, et même des rouges, mais quelle que soit la couleur de leur peau, il n'y a en tout qu'une seule espèce d'hommes, il n'y en a pas deux. Voilà pourquoi, visiblement, la révolution a commencé à faire le tour du monde, et, à mesure que les mêmes idées seront répandues par le monde entier, la révolution aussi y sera propagée. Ce que nous voyons est le commencement de la révolution universelle.

XXV

Néanmoins on ne parle partout que des progrès de la science, du développement de l'intelligence; comment concilier ensemble le déve-

loppement de l'intelligence, et des horreurs comme celles dont nous lisons la description dans les journaux, par exemple en Russie. Entre la conduite des Bolcheviks et les progrès de la science contemporaine, quelle relation peut-il y avoir ? C'est précisément cette relation entre la révolution et la science, qu'il importe de bien connaître, et par conséquent de mettre clairement en lumière.

La révolution est née de la science ; et à mesure que la science se propage davantage, la révolution aussi se propage d'elle-même, logiquement, c'est-à-dire comme un effet procède de sa cause. Mais de quelle science s'agit-il donc ? De celle que l'on a justement appelée la science contemporaine, pour la distinguer de la science antique. En effet ce sont deux sciences bien distinctes, et même bien différentes. On l'appelle aussi science transcendentale, parce qu'elle est ou du moins elle a la prétention d'être au-dessus de toutes les autres ; la plus admirée de toutes, parce qu'elle est la plus difficile à comprendre, et la moins comprise entre toutes les autres. De son vrai nom elle s'appelle la nouvelle Philosophie.

Comment la nouvelle philosophie conduit-elle à la révolution, voilà une question intéressante, et qui mérite d'être étudiée avec soin. C'est ce que nous allons essayer de faire.

XXVI

Si l'on veut expliquer à fond quelle est la

cause de la révolution, c'est dans la nature même de l'homme qu'il faut en chercher l'origine. Comment cela ? quelques simples notions de psychologie vont éclairer toute la question. Chacun de nous, sans même l'avoir appris, sait par sa propre expérience, que chaque homme est composé pour ainsi dire d'une double nature ; l'une s'appelle la nature raisonnable, et l'autre la nature sensible. Chacune a ses inclinations propres, non seulement différentes, mais le plus souvent opposées entre elles.

Placé entre ces deux natures, l'homme est tiré par elles tantôt à droite, tantôt à gauche. Il est toujours, pour ainsi dire, comme à l'entrée de deux chemins. Entre les deux il peut choisir celui qui lui plaît davantage, il en est le maître. Mais selon qu'il prend l'un ou l'autre, il est clair qu'il n'aboutit pas au même point, c'est-à-dire, selon qu'il obéit à sa nature sensible ou à sa nature raisonnable, le résultat n'est pas le même. Par exemple, dans la même famille il y a deux frères, dont l'un prend le chemin de droite, et l'autre le chemin de gauche, entre les deux on sait quelle est la différence ; le premier est un fils pieux envers ses parents et heureux, le second un fils débauché et malheureux.

Dans une ville ou dans un village, partout où plusieurs hommes demeurent ensemble ou à côté l'un de l'autre, chacun sait bien la différence énorme qu'il y a entre demeurer à côté d'un voisin égoïste, jaloux, injuste, voleur, ou à

côté d'un homme honnête et bienveillant, respectueux de la personne et des droits d'autrui, et qui traite les autres comme il désire être traité lui-même. A côté de l'homme juste vous êtes tranquille et vivez en paix, vous savez que vous n'avez rien à craindre. A côté du voleur, vous n'êtes jamais sans inquiétude, parce que, à tout moment, il faut que vous soyez sur vos gardes, toujours prêts et armés pour vous défendre. Et cela pourquoi, quelle en est la cause? Parce que l'un obéit à sa nature raisonnable, ou plus brièvement à la raison, tandis que l'autre obéit à sa nature sensible, ou plus brièvement à la passion. En deux mots, raison ou passion, voilà les deux forces auxquelles obéissent tous les hommes.

XXVII

Puisque c'est de la société seulement que nous parlons ici, il est certain que le but de toute société est d'assurer, aux hommes qui la composent, la sécurité, l'ordre et la paix. C'est pour cela que dans toute société, tout est disposé pour aider les hommes à vivre selon la raison; et, afin que les écarts ou les excès de la passion ne troublent pas la paix, et ne compromettent pas la sécurité des citoyens, toutes les précautions nécessaires sont prises.

Quelles sont ces précautions, personne ne l'ignore. D'abord il y a, dans tout pays, une science particulière, laquelle est enseignée, non

seulement dans les écoles, mais dans chaque famille; c'est la science des mœurs ou science "de la vie." Dans cette science tout à fait spéciale toutes les actions sont mentionnées, et chacune est marquée de la note propre qui lui convient, savoir, actions bonnes et actions mauvaises, actions élevées, belles, glorieuses, actions basses, viles et méprisables.

Jusqu'à maintenant, ont été regardées comme bonnes et honorables, les actions conformes à la raison; et jugées comme mauvaises et honteuses les actions contraires à la raison, inspirées seulement par la passion.

Conformément à cette distinction entre actions bonnes et actions mauvaises, il y a dans chaque société ce qu'on appelle des lois, c'est-à-dire des règles précises, pour indiquer nettement aux citoyens ce qu'ils doivent éviter et ce qu'ils doivent faire. Puis pour faire exécuter ces lois, il y a ce que l'on appelle des magistrats, surveillants, juges, administrateurs de toute sorte.

Enfin dans chaque pays, en dehors des lois et des magistrats, il y a encore l'usage et la conscience publique. C'est-à-dire que beaucoup de choses ne sont point commandées par les lois, et desquelles cependant l'usage fait une obligation pour tous; et beaucoup même de fautes ne sont point pousuivies par les magistrats, et que cependant la conscience publique ne pardonne pas. Des entraves à la liberté, partout.

XXVIII

En résumé, à vrai dire, il n'y a qu'une seule tyrannie, savoir, la distinction et la différence que les hommes ont mises jusqu'à maintenant entre le mal et le bien, entre une action louable et une autre, selon qu'elle est ou non conforme à la raison, selon qu'elle procède, comme de sa cause, de la raison ou de la passion.

Et que prétend à ce propos la révolution? Elle prétend que toute différence entre actions bonnes et actions mauvaises, soit supprimée. Car, puisque le même homme est composé d'une double nature, l'une raisonnable et l'autre sensible, pourquoi une seule de ces natures serait-elle libre, et toujours la maîtresse, tandis que l'autre serait toujours assujettie, toujours esclave de la première. Entre la passion et la raison il doit y avoir égalité, et l'une ne doit pas être plus libre ni plus privilégiée que l'autre.

De telle sorte que ce n'est pas seulement dans la société que la révolution veut opérer un changement complet, radical; c'est dans la personne de l'homme lui-même. Comment cela? Jusqu'à maintenant, dans la société, ce qu'on appelait autorité ou pouvoir de gouverner était entre les mains des chefs, de ceux qui étaient la tête de la société. "C'est la tête qui gouverne", voilà ce qu'on avait toujours dit.

Or dans la nouvelle société il n'en est plus ainsi; l'autorité n'est plus dans la tête, elle est "dans les pieds". C'est-à-dire que c'est le peuple, la multitude, qui délibère, qui décide et qui commande; ceux qui étaient autrefois les chefs ne font plus qu'obéir. C'est le peuple qui est le "Souverain", et qui gouverne.

Dans l'homme pareillement. Autrefois c'était la raison, qui gouvernait, et l'on trouvait cela tout naturel, parce que c'est dans la nature raisonnable que se trouvent les yeux de l'esprit. La passion n'était pas détruite pour cela, elle était seulement modérée et réglée, par la raison; de cette manière beaucoup d'écarts regrettables, beaucoup d'accidents nuisibles pour l'homme étaient évités dans la vie.

XXIX

Aujourd'hui, entre la raison et la passion l'égalité est proclamée; la passion est déclarée libre; la raison n'a plus le pouvoir de lui commander, la passion va du côté qui lui plaît; la raison, si elle n'est pas d'accord avec la passion, n'a qu'à se taire et obéir. Et alors, qu'arrive-t-il? Naturellement ce qui doit arriver, quand ce sont les pieds qui conduisent la tête. Inévitablement ils s'égarent, et les pieds et la tête tombent ensemble dans quelque précipice, et ils y périssent. Ainsi périssent infailliblement tous ceux qui se laissent gouverner eux-mêmes non par la raison, mais par la passion.

On en voit des exemples tous les jours; et pourtant, dans le plan de la révolution, le point le plus important à réaliser, c'est la faculté

octroyée à chacun de faire tout ce qui lui plaît ; en d'autres termes, " la liberté de la passion. "

Là-dessus, au nom du sens commun, mille protestations s'élèvent de toutes parts.

Qui donc a jamais dit que ce qui devait gouverner l'homme c'était sa passion. Au contraire n'a-t-on pas toujours enseigné qu'au-dessus de l'homme, il existe une loi, que l'homme n'a point faite, et qu'il est tenu d'observer. Or observer la loi, ce n'est pas en suivant sa passion qu'il le pratique, parce que la passion est aveugle, et ne sait où elle va, mais bien en suivant sa raison, parce que la raison a des yeux et sait ce qu'elle fait. A cela que répond la révolution?

Elle n'est nullement enbarrassée, elle supprime la loi ; alors la loi n'existant plus, rien ne gêne plus la liberté. C'est simple, c'est radical, c'est la liberté absolue. Mais direz-vous, supprimer une loi supérieure à l'homme, que l'homme n'a pas faite, est-ce possible? D'après le sens commun, et d'après la science d'autrefois, évidemment non, cela ne se peut pas, mais d'après la nouvelle philosophie, rien de plus aisé ; pour cela voici comment on raisonne.

Une chose que je n'admets pas, existe-t-elle ou non, peu m'importe, pour moi c'est comme si elle n'existait pas. Ainsi par exemple, un propos commun parmi les étudiants est celui-ci. Si vous croyez que Dieu existe, pour vous il existe. Moi au contraire je n'y crois pas, pour moi il n'existe pas. Par là on voit comme il est

aisé de supprimer la loi et tout ce qui gêne la liberté. Il suffit pour cela de faire, à l'égard de cette loi, le même raisonnement que tout à l'heure, c'est-à-dire, si vous croyez vraiment qu'il existe une loi absolue, souveraine, universelle, pour vous cette loi existe, et par conséquent vous n'êtes plus libre de faire tout ce que vous voulez. Moi au contraire je ne crois pas que cette loi existe, donc pour moi elle n'existe pas, par conséquent je garde toute ma liberté. Une seule chose pourrait la limiter, savoir, un obstacle insurmontable qui m'arrête, ou un autre homme, plus fort ou plus rusé que moi, qui me retient.

Ainsi parlent les partisans de la science nouvelle, la plus avancée, les Révolutionnaires. Et leur conclusion, la voici :

" Nous sommes les plus forts, ou du moins les plus audacieux, marchons, bientôt nous serons les maîtres du monde." A cela que répondre? Que leur raisonnement est absurde, et leur conduite abominable. Car nier l'existence de la loi n'est pas pour cela supprimer la loi, pas plus que nier le soleil quand il brille au ciel, ne serait supprimer le soleil. Or une chose aussi claire que le jour c'est bien la différence entre une bonne action et une mauvaise.

XXX

Et pourtant, afin que le plan de la révolution soit complètement réalisé, il faut que cette distinction entre le mal et le bien disparaisse,

qu'elle soit effacée de l'esprit des hommes; car, si à tout moment un individu craint de mal faire, toute sa vie il ne sera qu'un esclave, jamais il n'aura toute sa liberté.

Pour lui ôter toute crainte et tout scrupule, la révolution lui démontre qu'entre bien et mal non seulement il n'y a pas de différence, mais qu'il ne peut pas y en avoir. Comment cela? Parce que, d'après la science la plus avancée, " la seule réalité existante est la matière. " Soit dans l'homme lui-même, soit en dehors de l'homme, soit dans le ciel, soit sur la terre, il n'y a que de la matière, par conséquent il n'y a rien à craindre, puisque, en dehors de la matière et au-dessus d'elle il n'y a rien. Tel est le dernier mot de la science.

Donc si dans l'homme aussi tout est matière, ne lui demandez pas, dans sa conduite, autre chose que ce que la matière peut produire. Or par elle-même de quoi la matière est-elle capable? Nous le voyons tous les jours sous nos yeux. La matière, naturellement aveugle et inconsciente, obéit à ce que l'on peut appeler ses inclinations, c'est-à-dire que, selon qu'elle est attirée ou repoussée, elle s'approche ou s'éloigne, elle forme des combinaisons, subit des changements de toutes sortes, mais jamais personne n'a eu la pensée de lui faire un reproche ou de la louer, à cause de la forme qu'elle prend ou de l'effet qu'elle produit, ce serait complètement ridicule.

De même, si dans l'homme tout est matière, et s'il n'y a que de la matière, évidement ce qu'on appelle pensée, affection, volonté, passion, tout cela ne peut être que des mouvements et des combinaisons de la matière et pas autre chose. Mais dans des mouvements et des combinaisons de la matière, il est clair qu'il ne peut y avoir ni mal ni bien. Donc appeler bonne ou mauvaise une action qui n'est autre chose qu'un effet produit par la matière, est une parole qui n'a pas de sens, par la raison que si l'homme est matière, il n'est pas responsable de ses actions, pas plus qu'une pierre qui tombe n'est responsable si elle écrase un homme dans sa chute.

De la résulte dans l'enseignement contemporain une contradiction qui n'a pas encore été assez remarquée, savoir, d'une part, au nom de la science révolutionnaire, le maître de philosophie enseigne que la matière seule existe et que tout est matière; ainsi le veut le programme international; sous peine de demeurer en retard du progrès; d'autre part, le maître de morale, au nom de l'expérience et du sens commun des peuples, enseigne aux jeunes générations le droit chemin de la vertu, et les presse de toutes ses forces d'y marcher, c'est une plaisanterie, une dérision.

Avant de monter dans leurs chaires pour y donner leurs savantes leçons, le maître de philosophie et le professeur de morale devraient

d'abord s'entendre ensemble. Ils n'auraient pas de peine à comprendre, car ils sont intelligents, que l'un contredit l'autre; que le maître de philosophie ruine d'avance ce que le professeur de morale s'efforce de construire; car à des hommes convaincus que tout est matière et que la matière seule existe, il est inutile de parler de vertu, ils ne vous entendront même pas. Ce mot vertu, n'a plus de sens pour eux, c'est un idéal sans réalité. Il est vrai que dans les livres, surtout dans les discours, on en parle souvent, même aujourd'hui; mais cela ne remplit ni le ventre ni la bourse, c'est vide; aussi les hommes en général, n'y attachent-ils aucune importance.

XXXI

Après cela il n'est pas étonnant que, par tout le Pays, les hommes sérieux, et soucieux de l'avenir, répètent si souvent la même plainte: "Où allons-nous"? disent-ils. La science fait pourtant chaque jour des progrès, la morale est enseignée avec zèle dans toutes les écoles, et malgré cela, chaque année, presque chaque jour la vertu devient de plus en plus rare, bientôt on n'en rencontrera plus.

Encore une fois il n'y a rien là qui doive surprendre. Ce qui étonnerait, au contraire, ce serait qu'il en fût autrement. Car lorsque l'enseignement, à tous les degrés, est matérialiste, être surpris que la vertu diminue, c'est comme si on était surpris qu'un homme se meure, quand

on lui arrache l'âme du corps. Evidemment sans son âme il ne peut pas vivre. De même ce qui sort logiquement de l'enseignement matérialiste, l'expérience ne le prouve que trop—ce n'est pas la vertu, c'est l'égoïsme, c'est-à-dire juste le contraire de la vertu.

Or, l'égoïsme, quand il est le plus fort et que rien ne peut plus le contenir, va de lui-même à la révolution. Et la raison en est bien simple.

En effet que dit l'égoïste? "Je veux être le maître à mon tour. Avec ceux qui pensent comme moi, nous avons assez de force. En nous réunissant nous renverserons tout ce qui fait obstacle à nos desseins. Pour cela, nous briserons s'il le faut la société actuelle, et nous en établirons une autre, dans laquelle c'est nous qui serons les maîtres à notre tour."

Ce plan de la révolution, nous le voyons aujourd'hui se réaliser sous nos yeux, presque à côté de nous, par les Bolcheviks. Il n'y a personne qui en entendant les cruautés, les horreurs, les infamies commises par ces furieux, n'en soit dans la stupéfaction.

Est-ce que ce sont des hommes, est-ce que ce sont des bêtes féroces? La vraie réponse est que ce sont "des révolutionnaires." Ils réalisent non pas à moitié, mais jusqu'au bout, le programme de la révolution. Et au regard de la science actuelle, il n'y a pas de reproche à leur faire, ni rien à leur répondre. En effet, s'il est vrai "qu'ils ne sont que matière, puisque

tout est matière ", ils n'ont pas de tort ; ils agissent comme ferait à leur place une force purement matérielle, par exemple un furieux ouragan, ou un raz de marée. Et ils continueront ainsi jusqu'à ce qu'une autre force plus puissante qu'eux les arrête ou les brise à leur tour.

XXXII

Si on jette aujourd'hui un coup d'œil sur le monde, n'y a-t-il pas vraiment de quoi être effrayé ? Car il est clair, surtout depuis trois ou quatre ans, que la révolution, comme une marée montante, se répand et envahit irrésistiblement presque toutes les contrées du monde. Or quand ce redoutable fléau se sera étendu à toute la terre, qu'arrivera-t-il ? Ce qui arrive quand la plus horrible tempête passe sur une contrée riche et fertile ; elle ravage, elle renverse tout ce qui est debout, et elle ne laisse après elle que dévastation et ruine. Ainsi fait la révolution ; violence, désordre, vols, meurtres, incendies, anarchie, voilà tout ce qu'elle a jamais produit, et qu'elle produit encore aujourd'hui même, remplissant le monde d'horreur, de stupéfaction et d'épouvante.

Mais, à un si grand mal n'y a-t-il pas quelque remède ; ou plutôt, avant que ce redoutable fléau n'envahisse complètement une contrée et la désole, n'y a-t-il pas quelque moyen de l'écarter, de le repousser ; en d'autres termes, là ou la révolution est seulement menaçante, et n'est pas

encore commencée, que faudrait-il faire pour l'éviter, elle et tous les désastres qu'elle apporte inséparablement avec elle ?

De toutes les questions agitées maintenant parmi les hommes, il n'y en a certainement pas de plus grave que cette question de la révolution, car pour l'avenir même du monde il n'y en a pas de plus importante.

Quand un homme souffre de quelque maladie et qu'il désire en être guéri ; ou bien quand il craint d'être atteint par quelque épidémie ou contagion, et qu'il désire en être préservé, que fait-il ? Tout d'abord il commence par rechercher l'origine de cette maladie, d'où elle vient, comment elle se propage. Puis, quand il a trouvé le principe du mal, il tâche d'y appliquer le remède convenable, c'est-à-dire, que quand il connaît la cause de la maladie, il supprime cette cause, et alors la maladie guérit d'elle-même, ou du moins elle ne se propage pas davantage.

Or la révolution, telle qu'elle apparait aujourd'hui dans le monde, à quoi peut-elle être comparée mieux qu'à une épidémie générale bientôt répandue par toute la terre. Et l'influenza espagnole qui a visité presque tous les peuples, n'est-elle pas une image saisissante de cette épidémie sociale, étendue maintenant à presque toutes les nations civilisées, la Révolution mondiale.

XXXIII

Or quelle est l'origine de cette maladie pour pour ainsi dire universelle?

Comme il a été dit plus haut et démontré précédemment, la révolution telle qu'elle est aujourd'hui est née de la science, et c'est par la science qu'elle se propage d'elle-même par le monde entier.

Mais quelle est cette science? On l'appelle la science contemporaine, ou science nouvelle. En quoi consiste au juste cette science? Au point de vue ou nous sommes placés, c'est-à-dire, par le côté où cette science nouvelle touche à l'ordre social, on peut la réduire à ces deux principes, ou propositions fondamentales, savoir:

(1) Pour moi rien n'existe que ce que je crois exister.

(2) Dans l'homme et hors de l'homme, au ciel et sur la terre la seule réalité existante est la matière.

A la base de l'enseignement scientifique mettez ces deux propositions, comme point de départ, de là, tout naturellement, c'est-à-dire "logiquement" suit la révolution, comme un ruisseau découle de sa source. Avec cette différence que, la science étant maintenant répandue partout, la révolution qui en sort n'est pas un ruisseau, mais un torrent épouvantable, lequel grossissant de jour en jour, menace de tout

dévaster sur la terre, et dévastera en effet, si rien ne l'arrête.

Ici vient la question capitale, savoir, à ce torrent de la révolution, quelle est la digue qu'il faudrait opposer? Existe-t-il quelque part au monde une force capable de contenir ce débordement d'anarchie, et quelle est cette force?

Après ce qui a été dit précédement, la réponse à cette question n'est pas difficile. C'est de la science que la révolution est née, mais de quelle science? car il y en a deux, l'ancienne et la nouvelle. Or par rapport à la société, en quoi ces deux sciences diffèrent-elles? D'après chacune d'elles, quels sont les principes ou fondements qui portent pour ainsi dire le monde? Ces principes ont été déjà souvent répétés, cependant à cause de leur importance, les voici encore une fois.

L'ancienne science d'abord;

(1) Au-dessus des hommes et au-dessus des peuples, je crois qu'il existe une loi souveraine et universelle, à laquelle les hommes et les peuples sont soumis et doivent obéir.

(2) Je crois que, soit dans l'homme, soit au-dessus de l'homme il existe autre chose que de la matière.

(3) Je crois qu'entre la matière et l'esprit il y a une différence.

(4) Je crois qu'il n'y a pas de liberté contre la loi.

La nouvelle science;

(1) Je ne connais pas d'autre loi que celle qu'il me plaît d'observer.

(2) La liberté de l'homme est absolue. Le monde et tout ce qu'il y a dans le monde appartient au plus fort ou au plus rusé.

XXXIV

Ainsi, en résumé, c'est une question de oui ou de non. C'est-à-dire, oui ou non, l'homme a-t-il un maître? Oui ou non existe-t-il autre chose que de la matière? Oui ou non, je ne vous en demande pas davantage. Après cela je saurai ce que je dois faire. Pour un homme intelligent, et tous les hommes aujourd'hui le sont, ou du moins ils ont la prétention de l'être, pour un homme intelligent il suffit de poser "le principe"; lui-même se charge d'en tirer les conséquences.

"OUI", répond la science d'autrefois, il y a autre chose que de la matière. "NON", répond la science nouvelle, il n'y a rien autre chose. Et à l'heure où nous sommes, d'un bout la terre à l'autre, ce qu'on appelle "le monde civilisé", est partagé entre ces deux enseignements. L'un partant de ce principe que tout est matière, l'autre de ce principe qu'en dehors et au-dessus de la matière il y a l'esprit; c'est pourquoi l'un s'appelle athéisme, l'autre spiritualisme.

Par le monde entier aujourd'hui ces deux enseignements sont en opposition, on peut dire en guerre. Et partout, selon que l'un ou l'autre

est le plus fort, la révolution en même temps avance ou recule.

Le produit naturel, la conclusion logique de l'enseignement athée, c'est la révolution; et c'est précisement en vue de la propager partout en vue de la révolution mondiale, comme on l'appelle, que l'enseignement athée non seulement est répandu partout, mais partout organisé, et devenu comme une institution de l'Etat; en ce sens que, presque en tout pays aujourd'hui enseignement public et enseignement athée sont la même chose. Car le programme des études, la direction générale de l'enseignement public, les mots d'ordre qui circulent parmi les professeurs, et parmi le peuple, tout est dans le sens de l'athéisme.

S'étonner après cela que la révolution gagne chaque jour du terrain, et que la société soit ébranlée, c'est comme si on s'étonnait qu'une maison brûle, après qu'on y a mis le feu soi-même; ou qu'elle s'écroule, quand on a arraché ses fondements.

XXXV

En deux mots, "L'athéisme, voilà l'ennemi." Le principe ou du moins la principale cause du mal social contemporain, l'origine de la maladie qui menace de tuer la société, la voilà, c'est l'athéisme dans l'enseignement. Par conséquent le remède à ce mal est tout indiqué, savoir, "à l'enseignement public athée, substituer l'enseignement spiritualiste."

Ah! quel est donc le fou qui parle ainsi, vont dire les partisans de la nouvelle science et du nouvel enseignement. Quel est l'homme assez ignorant, assez arriéré, pour s'arrêter à une telle pensée, et assez impertinent pour oser l'écrire! Au vingtième siècle, au milieu des splendeurs de la civilisation et de la science la plus avancée, science physique, science chimique, science mécanique, qui donc peut être assez étranger à tous ces progrès pour oser parler de revenir plus de cinquante ans en arrière, et de reprendre, dans nos écoles contemporaines, l'enseignement simpliste de nos ancêtres, lesquels, dans leur ingenuité croyaient sincèrement et enseignaient à leurs enfants que "tous les hommes ont un Maître au ciel."

A quoi il est aisé de répondre que les progrès dans les sciences physiques n'ont rien changé au gouvernement de l'univers. Les lois qui étaient nécessaires il y a mille ans, pour que l'ordre règnât dans le monde, ne sont pas moins nécessaires aujourd'hui. Et ce qui était vrai pour nos ancêtres n'est pas moins vrai pour leurs descendants. Or à la base de leur enseignement quel fondement plaçaient-ils? Ils ne disaient pas, comme aujourd'hui les docteurs de la révolution, "Rien n'existe que la matière, par conséquent l'homme n'a rien à espérer ni rien à craindre donc il est absolument libre; qu'il fasse ce qu'il voudra, pourvu qu'il soit le plus fort ou le plus habile." A leurs enfants et

petits-enfants nos pères disaient "Crains Dieu et observe sa loi, car c'est là tout l'homme." Time Deum, et serva mandata, hoc est enim omnis homo.

Si chacun veut bien écouter au fond de son cœur, son bon sens lui dira qu'en effet pour être un homme il n'y a pas de plus sage conseil. Et d'autre part, l'expérience de tous les siècles atteste que, même pour les peuples les plus prospères, il n'y a pas d'autre moyen de conserver chez eux l'ordre et la paix. "Crains Dieu et observe sa loi".

C'est clair, ce n'est pas difficile à comprendre, néanmoins les hommes de notre génération le comprendront-ils? C'est peu probable, du moins pour le plus grand nombre. Il faut auparavant qu'ils voient de leurs yeux les fâcheux effets de l'enseignement qu'ils ont reçu, ou qu'ils ont eux-mêmes donné aux autres. En d'autres termes il faut d'abord que la révolution passe sur le pays et le bouleverse; après cela seulement ils se demanderont d'où elle est venue et le comprendront.

Déjà comme une tempête à l'horizon, on l'entend, on la voit venir, menaçante et terrible. Quelques hommes sages et prévoyants voudraient bien l'arrêter, l'empêcher au moins de tout renverser. Empêcher la révolution de venir. c'est bien difficile maintenant, il est trop tard. On n'arrête pas un ouragan quand il est en route; mais pendant qu'il est encore loin, on prend

ses précautions pour ne pas périr dans la catastrophe. C'est tout ce qui est possible à l'heure où nous sommes.

Puis quand la tempête aura passé, que, selon le programme de la révolution, l'ancienne société aura été brisée, les hommes qui vivront alors travailleront à en relever les ruines, à construire une société nouvelle, et, instruits par une dure expérience, pour établir solidement cette société "de l'avenir", ils chercheront un autre fondement que celui de "la science athée".

XXXVI

Dire ces choses aux hommes de maintenant, est une peine à peu près inutile. La plupart d'entre eux ne les croiront pas, et même, en comprenant que ce qui précède est la vérité, en pratique ils n'en tiendront aucun compte; ils n'en feront rien, si non hausser les épaules et sourire. "Raisonner ainsi pouvait être bon il y a cinquante ans, mais depuis ce temps, "le monde a évolué", nous n'en sommes plus à "l'ère de Tempo"; pour nous tenir un pareil langage il est trop tard."

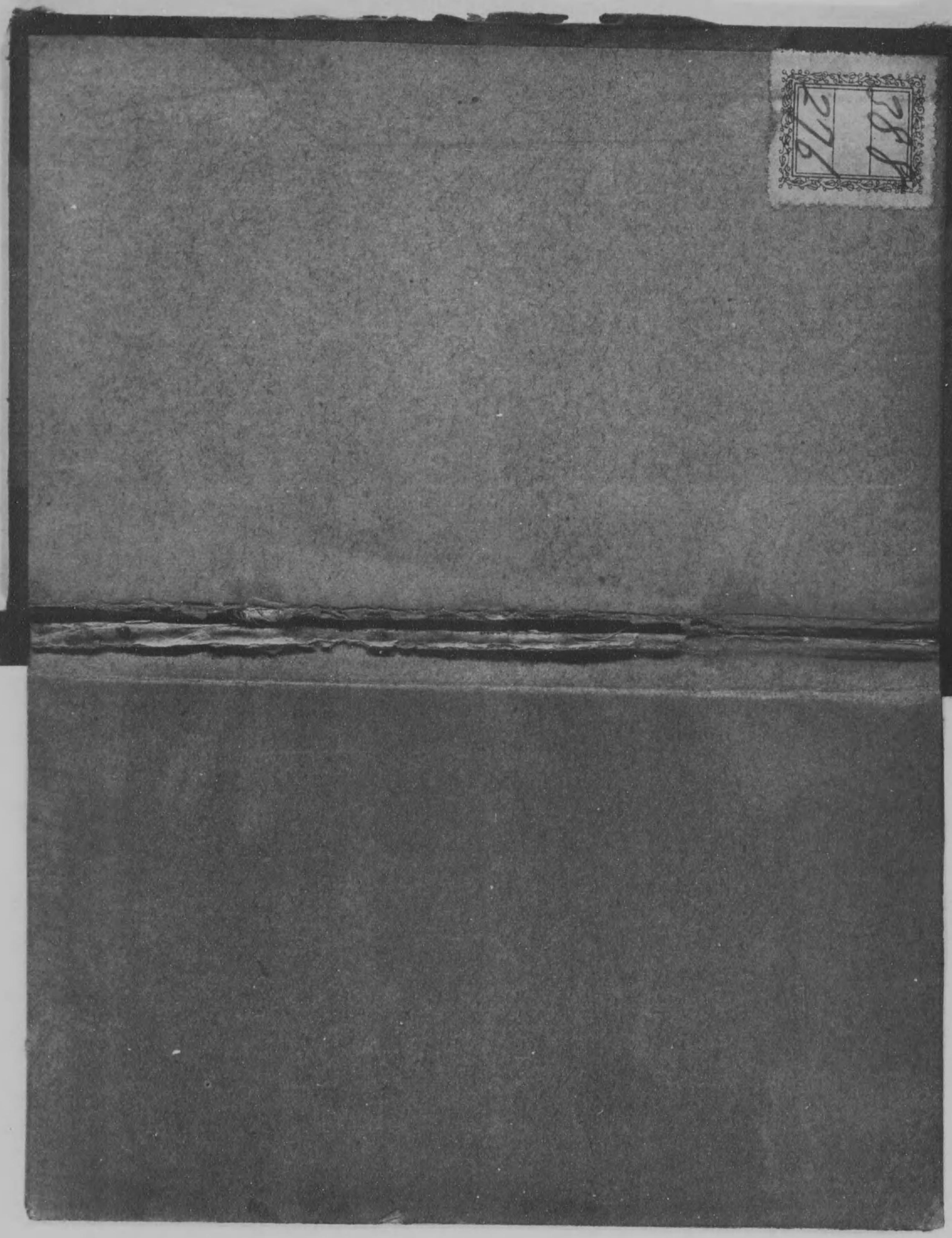
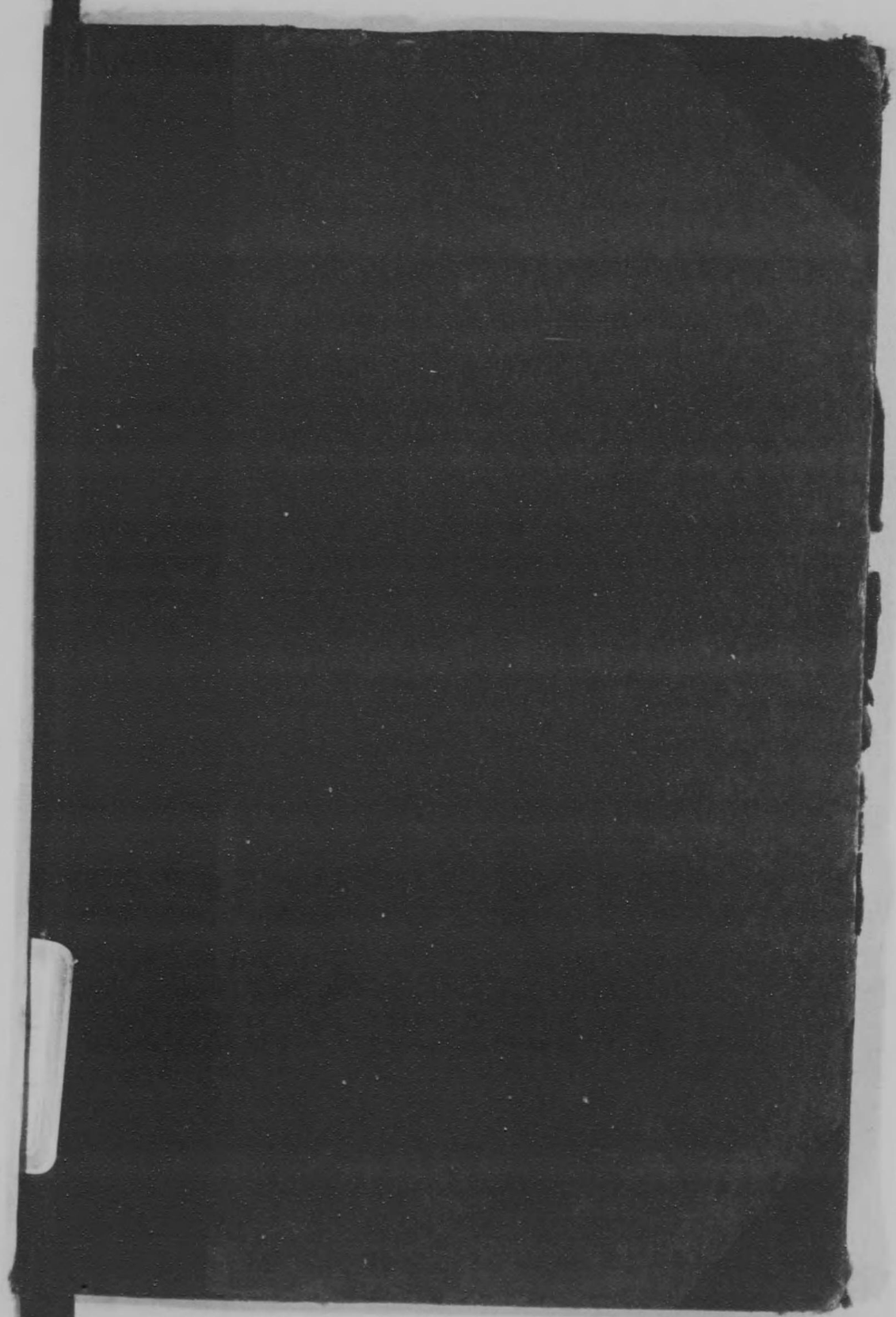
En effet il est bien tard. Quand une erreur, aussi grave que celle dont nous parlons, est devenue générale parmi les hommes, dans un pays entier, cette erreur est incorrigible; ou plus exactement, elle ne peut plus être corrigée que par elle-même, c'est-à-dire qu'il faut attendre premièrement qu'elle ait produit tous les effets,

toutes les conséquences qu'elle doit produire; puis, quand les hommes ont vu par eux-mêmes tous les maux engendrés par cette erreur, alors enfin ils ouvrent les yeux, et reconnaissent qu'ils se sont trompés, ou qu'on les a trompés, ce qui est souvent aussi vrai l'un que l'autre.

Ainsi en sera-t-il de l'athéisme dans l'enseignement. Les hommes de la prochaine génération, voyant les maux qu'il aura causés, comprendront que là était la cause du mal, et combien ils regretteront alors que leurs pères n'y aient pas appliqué le remède, quand il était encore temps de le faire.

Imprimerie de Nazareth Hongkong.

9.7.1 5



終